

和仏法律学校講義録

吾孫子, 勝 / 下村, 宏

(出版者 / Publisher)

和佛法律學校

(巻 / Volume)

2-25

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

57

(発行年 / Year)

1902-11-08

(明治三十五年十一月四日第三種郵便物認可 毎月十八日四日五日六日八日十日十一日十三日十五日十六日十八日廿一日廿三日廿五日廿六日廿八日廿九日卅日發行)

明治三十五年十一月八日發行

三十五年度第二學年第二十五號

和佛法律學校講義錄

號 叅 第

和佛法律學校

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 20 1 2 3

第二學年第二十五號目次

民法債權 自第二章第二節
至同章第十四節 (自二四五
至二六〇)

法學士 吾孫子 勝

財政學 (自三三九
至三九二)

法學士 下村 宏

雜報 ○損害賠償ニ關スル特別規定○假差押ノ續行○討論會

090
1902
2-1-25

ニ因リテ消滅スヘシ(第一七四條第五號)

第二 用方ニ從ヒ使用及ヒ收益ヲ爲スノ義務

賃借人ハ契約ヲ以テ定メタル用方ニ從フニ非サレハ賃借物ノ使用及ヒ收益ヲ

爲スコトヲ得ヘカラス契約ニ其定ナキトキハ物ノ性質ニ依リテ定マリタル用
方ニ從ヒ其使用收益ヲ爲スコトヲ要ス(第六一六條第五九四條第一項同說舊民

法財産編第一四一條項太利民法第一〇九八條佛國民法第千七百二十八條第一

項ハ賃借人ハ契約ニ依リ定マリタル用方ニ從ヒ又契約ナキトキハ事情ニ依リ

定マリタル用方ニ從ヒ良家父ノ如ク賃借物件ヲ使用スヘシト定メ獨逸民法ハ

其五百四十八條ニ於テ裏面ヨリ用方ニ關スル制限規定ヲ設ケ契約ニ依ル用方

ニ因リ生シタル物ノ用耗損廢並ニ變更ニ付テハ賃借人ハ其責ニ任セサル旨ヲ

定ム

賃借人ハ右陳ヘタルカ如ク契約又ハ物ノ性質ニ依リ定マリタル用方ニ從ヒ物

ヲ利用スルコトヲ得ルニ止マリ隨テ(第一)唯其借受ケタル場所又ハ物件ノミヲ

利用シ得ルニ止マリ之ヲ家屋ニ付テ言ヘハ其借受ケサル場所ヲ利用スル能ハ

第二學年第二十五號目次

民法債權 自第二章第二節
至同 十四節 (頁一六〇至一六四)

法學士 吾孫子 勝

政 學 (頁三三九)

法學士 下村 宏

雜報 ○損害賠償ニ關スル特別規定○假差押ノ續行○討論會

090
1902
2-1-25



ニ因リテ消滅スヘシ(第一七四條第五號)

第二 川方ニ從ヒ使用及ヒ收益ヲ爲スノ義務

賃借人ハ契約ヲ以テ定メタル用方ニ從フニ非サレハ賃借物ノ使用及ヒ收益ヲ

得ヘカラス契約ニ其定ナキトキハ物ノ性質ニ依リテ定マリタル用
方ニ從ヒ其使用收益ヲ爲スコトヲ要ス(第六一六條第五九四條第一項同說舊民

法財產編第一四一條奧太利民法第一〇九八條佛國民法第七百二十八條第一

項ハ賃借人ハ契約ニ依リ定マリタル用方ニ從ヒ又契約ナキトキハ事情ニ依リ

テ定マリタル用方ニ從ヒ良家父ノ如ク賃借物件ヲ使用スヘシト定メ獨逸民法ハ

其五百四十八條ニ於テ裏面ヨリ用方ニ關スル制限規定ヲ設ケ契約ニ依ル用方

ニ因リ生シタル物ノ用耗損廢並ニ變更ニ付テハ賃借人ハ其責ニ任セサル旨ヲ

定ム

賃借人ハ右陳ヘタルカ如ク契約又ハ物ノ性質ニ依リ定マリタル用方ニ從ヒ物
ヲ利用スルコトヲ得ルニ止マリ隨テ(第一)唯其借受ケタル場所又ハ物件ノミヲ
利用シ得ルニ止マリ之ヲ家屋ニ付テ言ヘハ其借受ケサル場所ヲ利用スル能ハ

（第二）唯其借受ケタル目的ニモ、物ヲ利用シ得ルニ止マリ住居ノ爲メニ借受ケタル家屋ハ之ヲ製造用ニ供スルコトヲ得ルハ第三經濟的ニ目的物ヲ利用シ得ルニ止マル換言スレバ可成ク貸借物ヲ傷害セザルヘキ狀態ヲ維持シ得ヘキ方法ニテ目的物ヲ利用スヘク右ニ付キ善良ナル管理者ノ注意ヲ加フルコトヲ要ス随テ直接ニ物ニ損害ヲ生スヘキ所爲ヲ爲シ得ヘカラサルハ勿論間接ニモ損害ヲ生スヘキ所爲ヲ爲スコトヲ得ス又右ニ付キ自己ノ責任故意又ハ過失ノミナラス家族雇人轉借人等ノ責任ニ關シテモ其責ニ任スヘシ（同說獨逸民法第五百四十九條第二項ハ貸借人カ貸借物件ノ使用ヲ第三者ニ委テタル場合ニ於テハ貸借人カ之ヲ許可シタルトキト雖モ第三者カ物ノ使用ニ付キ爲シタル罪過ニ付キ貸借人ニ於テ責ニ任スル旨ヲ定ム）

右陳フルカ如クナルヲ以テ貸借人カ契約ニ違反シタル方法ヲ以テ物ヲ利用シタル場合ニ於テ貸借人ハ貸借人ニ對シ不作爲ヲ訴求シ得ヘキヤ勿論ニ屬シ獨逸民法第五百五十條ニハ其明文アレトモ用方ニ關スル義務ノ不履行ハ一般債務ノ不履行ニ關スル規定ニ從ヒテ之ヲ決スヘク唯之ニ因リテ生シタル損害ノ

賠償ニ付テハ貸借人カ物ノ返還ヲ受ケタル時ヨリ一年內ニ之ヲ請求スルコトヲ要スルモノトス（第六〇〇條第六二二條其理由ニ付テハ前章第二節末段ヲ參照スヘシ）

第三 物ノ返還ノ義務

貸借人ハ契約終了ノ時ニ於テ目的物ヲ返還スルノ義務ヲ有ス（第六一六條第五九七條第一項同說獨逸民法第五五六條奧太利民法第一〇〇九條而シテ右ニ際シ貸借人ハ自ラ之ニ附屬セシメタル物ヲ收去スルコトヲ得ルモ借用物ヲ原狀ニ復スルコトヲ要ス（第六一六條第五九八條）

右陳ヘタル如ク貸借人ハ契約終了ノトキニ於テ目的物ヲ貸借人ニ引渡スヘキ義務アルノ結果其引渡ニ至ルマテ善良ナル管理者ノ注意ヲ以テ之ヲ保存スルノ義務アルコト勿論ニシテ第四〇〇條隨テ物カ契約ノ期間內ニ於テ滅失若クハ毀損シタルトキハ貸借人ノ過失ニ出テサルコトノ證明ナキ限ハ之ニ對シテ其責ニ任スヘシ（佛國民法第七百三十三條第七百三十五條ニハ其明文ナラザ前出民法第五四八條參照又物ノ修繕ハ保存ノ義務ヲ負テ者ニ於テ之ヲ爲スルヲ

要スルヲ常トスト雖モ質貸借ニ於テハ物ノ修繕ハ質貸人ノ負擔スルヲ本則トスルヲ以テ質借人ハ通常自ラ修繕ヲ爲スコトヲ要セスト雖モ善良ナル管理者トシテハ之ヲ放擲スルコトナク之カ修繕ヲ質貸人ニ求ムルノ義務アルモノトス第六一五條其他第三者カ目的物ニ付キ權利ヲ主張スル場合ニ於テ遲滯ナク之ヲ質貸人ニ通知スルヲ要スルコト前陳ノ如シ第六一五條

第四 質借權ノ讓渡又ハ質借物ノ轉貸ヲ爲ササルノ義務
舊民法財産編第三百四條ハ外國多數ノ立法例ニ倣ヒ反對ノ慣習ナキ限ハ質借人ハ其質借權ヲ讓渡シ又ハ其質借物ヲ轉貸スルコトヲ得ヘキモノト定ム是レ蓋シ質貸借ニ於テハ質貸人ハ主トシテ借貸ヲ受クルコトニ著眼シ借主タル人ノ如何ニ著眼セサルモノト認メテ實際ノ需要ニ應センコトヲ期シタルモノナルヘシト雖モ凡ソ質借關係ニ於テハ借主ノ如何ニ依リ貸主ノ利益ニ至大ノ關係アルコト勿論ニ屬シ且殊ニ質貸借ニ於テ其質貸ノ目的物ヨリ生スル收穫ノ一部ヲ以テ借貸ト爲ス場合ノ如キニ於テ借主ノ如何ハ貸主ノ利益ニ大ナル影響ヲ生シ讓渡轉貸ノ自由ヲ以テ本則ト爲スハ却テ實際ノ必要ニ合セサルモ

ソト云フヘキヲ以テ本法ハ質借人ハ質貸人ノ承諾アルニ非サレハ其權利ヲ讓渡シ又ハ質借物ヲ轉貸スルコトヲ得サルモノト定ム第六一二條第一項然レトモ之ヲ外國法律ニ徵スルニ獨逸ノ普通法並ニ佛國民法第七百十七條ニ依レハ契約ニ他ノ定ナキトキハ本則トシテ轉貸又ハ讓渡シ得ヘキモノトシ奧太利民法第九十八條ニ依レハ物ノ所有者ニ損害ヲ生セシメスシテ轉貸シ得ヘキカ又ハ契約ニ明カニ禁止ナキトキハ轉貸シ得ヘク獨逸民法第一草案ニモ質借人ハ質貸人ノ承諾ナクシテ讓渡轉貸ヲ爲シ得ヘキ旨ノ定アリテ債權ノ讓渡シ得ヘキモノナリトノ原則ト相一致スルモノナリトモ然レトモ同國民法第五百四十九條ニ依レハ質借人ハ貸主ノ承諾ナクシテ第三者ニ讓渡轉貸ヲ爲スコトヲ得サルモノトシ唯貸主カ第三者ノ一身ニ重要ナル理由ノ存スルニ非サルニ之カ承諾ヲ拒ミタルトキニ限り法定ノ豫告期間ヲ遵守シテ契約ヲ解除シ得ヘキモノト定ム

上陳ヘタルカ如ク本法ハ讓渡轉貸ニ付キ質貸人ノ承諾アルヲ要スト定ムト雖モ此規定タル當事者ノ意思ヲ解釋シタル補助規定ニ外ナラサルヲ以テ反對契

約ヲ許スコト勿論ニ屬シ且其承諾ハ必スシモ質貸借契約ヲ締結スル當時ニ存セサルヘカラサルモノニ非スシテ爾後讓渡轉貸ヲ爲サントスルトキニ於テ之ヲ爲スヲ妨ケス此承諾ヲ缺ク場合ニ於テハ讓渡轉貸カ質貸人ニ對シ效力ヲ生セサルコト勿論ナリト雖モ質借人カ前陳ノ規定ニ反シ第三者ヲシテ實際質借物ノ使用又ハ收益ヲ爲サシメタルトキハ質貸人ハ契約ノ解除ヲ爲シ得ヘキモノトシテ之ヲ保護ス(第六一二條第二項左ニ之ヲ細説スヘシ)

(甲) 讓渡ノ場合

質借人カ質貸人ノ承諾ヲ得テ質貸借ヨリ生シタル權利ヲ適法ニ讓渡シタルトキハ其義務モ共ニ第三者ニ移轉シ質借人ハ質貸借關係ヨリ脫スルヲ常トシ讓受人ハ質貸人ニ對シ讓渡人タル質借人ト同一ノ權利義務ヲ有スルニ至ルヲ常トスト雖モ質借人カ其權利ノミヲ讓渡シ依然質貸人ニ對シテ義務ヲ負擔スルコトアルヲ妨ケス

(乙) 轉貸ノ場合

讓渡ハ有償又ハ無償タルコトヲ得ヘク且質借人カ質貸人ニ對シテ有セシ權利

ト讓受人カ質貸人ニ對シテ有スヘキ權利トハ其内容ヲ同シタスル同一ノ權利ナルニ反シテ轉貸ハ必ス有償ナル場合ヲ謂ヒ轉借人ト質借人トノ間ニ更ニ一新ナル質貸借關係ヲ生シ面モ之ニ依リテ轉借人ニ生スル權利義務ハ必スシモ當初ノ質貸借契約ヨリ生シタル權利義務ト其内容ヲ同シタスルコトナシ但第三者ニ物ノ使用收益ヲ許容スルハ必スシモ常ニ轉貸ナリト謂フヘカラス轉借ハ質借人カ事實上物ノ支配ヲ第三者ニ許シ第三者カ質借人ニ代ル場合ニ於テ生スルモノトス故ニ親族僕婢訪問客ヲ家内ニ收容スルカ如キ場合ニ於テ轉貸ヲ生セサルコト勿論ナリ但質借人ハ最初ノ質貸借契約ニ依リ物ニ付キ取得シタル權利ヨリモ内容ノ廣大ナル權利ヲ轉借人ニ移轉スル能ハサルヤ言フ埃タス左ニ適法ニ轉貸アリタル場合ニ於ケル權利關係ニ付テ説カン

(一) 質貸人ト質借人トノ關係 ハ轉貸ニ依リ毫モ影響ヲ受タルコトナク第六百十三條第二項ハ轉貸ノ場合ニ於テモ質貸人ハ質借人ニ對シテ其權利ヲ行使スルコトヲ妨ケサル旨ヲ定ム蓋シ契約ハ第三者ニ利害ノ關係ヲ及ボササルヲ原則トスレハナリ

(二) 質借人ト轉借人トノ關係 ハ新ナル質貸借ノ關係ニシテ其間ニハ一般ニ質貸借契約ヨリ生スヘキ義務ヲ生スヘク其契約ノ趣旨ニ從ヒ其效力ヲ定ム

(三) 質貸人ト轉借人トノ關係 純理ヨリ言ヘハ質借人ト轉借人トノ間ノ契約ハ質貸人ニ對シ毫モ效力ヲ生スルコトナシト雖モ若シ此ノ如クセハ質貸人ト轉借人カ質借人ニ對シテ義務ヲ履行スルニ拘ハラス質借人ハ其質貸人ニ對スル義務ヲ履行セス獨リ不當ノ利ヲ占ムルコトナシト謂フヘカラス詳言スレハ質貸人ハ自己ノ所有物ヲ他人ノ使用ニ供セラレ而シテ質借人タル轉貸人ハ轉借人ヨリ借貸ノ支拂ヲ受クルニ拘ハラス其支拂フヘキ借貸ヲ支拂ハサルニ因リ質貸人カ損害ヲ受クルコトナシト謂フヘカラス故ニ本法ハ質借人カ適法ニ質借物ヲ轉貸シタルトキハ轉借人ハ質貸人ニ對シテ直接ニ義務ヲ負フヘキモノト定ム(第六一三條第一項)故ニ借貸ノ支拂物ノ修繕等轉借人カ質借人ニ對シ轉貸契約ニ因リ負擔スル義務ハ質貸人ノ求ニ依リ之ニ對シテ履行スルノ責アリ

(イ) 轉借人ノ質貸人ニ對スル義務ハ質借人ニ對スル義務ノ範圍ニ限ラル蓋シ

轉借人カ適法ニ其權利ヲ取得シタルニ於テハ其契約ニ依リ負擔シタルヨリモ多クノ義務ヲ質貸人ニ對シテ負擔スヘキ理由ナケレハナリ

(ロ) 質貸人ノ權利ハ質借人カ質貸人ニ對シテ負擔スル義務ノ範圍ニ限ラル蓋シ質貸人ハ質借人カ轉貸シタルニ由リ其質借人ニ對スルヨリモ多クノ權利ヲ轉借人ニ對シテ取得スヘキ理由ナケレハナリ質貸人ハ右ノ範圍内ニ於テハ直接ニ自己ノ權利ニ基キ轉借人ニ對シテ義務ノ履行ヲ求ムルコトヲ得ヘシト雖モ轉借人カ既ニ質借人ニ對シテ履行シタル義務ハ質貸人ノ請求ニ依リ更ニ之ヲ履行スヘキ理ナク唯第六百十三條第一項ハ轉借人ハ借貸ノ前拂ヲ以テ質貸人ニ對抗スル能ハサルモノト定ム即チ約定ノ時期以前支拂ノ時期ニ付キ別段約束ナキ場合ニ於テハ慣習上又ハ法定ノ時期以前ニ轉借人カ借貸ヲ支拂ヒタル場合ノミ之ヲ以テ質貸人ニ對抗スルコトヲ得サルモノト定ム蓋シ債權者タル質貸人ヲ詐害スルノ虞アルニ由ル同様ノ規定ハ佛國民法第七百五十三條ニモアリ)

民法第四百二十三條ノ規定スル間接訴權ノ途アルニ由リ質貸人ハ質借人ニ代

リ轉借人ニ對シ其義務ノ履行ヲ求メ得ヘキニ拘ハラヌ本法カ本條ノ規定ヲ設ケタル所以ニ付テハ梅博士民法要義中第六百十三條ノ釋義ヲ參照スヘシ第六百十三條ノ規定ハ質貸人ト轉借人トノ間ニ質貸借ノ關係ヲ創設シタルモノニ非サルカ故ニ轉借人ハ質貸人ニ對シテ直接ニ權利ヲ行フコト能ハス換言スレハ同條ハ質貸人ニ權利ヲ付與シタルニ止マリ之ニ義務ヲ負ハシメタルモノニ非サルヲ以テ轉借人ハ質貸人ニ對シ直接ニ義務ヲ負フニ拘ハラヌ之ニ對シテ直接ニ權利ヲ行フコトヲ得ヘカラス且本條ノ規定タル質貸人ニ與フルニ轉借人ニ對スル直接ノ訴權ヲ以テシタルニ過キスシテ質貸人ノ有スル權利ヲ奪ヒテ質貸人ニ與ヘタルモノニ非サルヲ以テ質貸人カ轉借人ニ對シテ義務ノ履行ヲ求ムルコトヲ得ヘク轉借人ハ其履行ヲ拒ムコトヲ得ヘカラス而シテ若シ其後ニ於テ質貸人ヨリ義務ノ履行ノ求アリタルトキハ既ニ質借人ニ義務ヲ履行シタルニ因リ義務ヲ免レタル旨ヲ以テ答フルコトヲ得ヘシ

第二款 第三者ニ對スル效力

第三者ニ對スル質貸借ノ效力トハ質借人ノ有スル權利ハ之ヲ以テ其權利ノ目的物ニ付キ物權ヲ取得シタル第三者ニ對抗スルコトヲ得ヘキヤ否ヤノ問題ニシテ換言スレハ賣買ハ質貸借ヲ破ル(Kauf bricht Miethe)ヲフ原則ヲ認ムヘキヤ即チ質貸人ノ特定承繼人カ如何ナル程度ニ於テ質借人ニ對シ法律上羈束セララルヤ質貸借關係ヲ繼續スヘキ義務アリヤテフコト是ナリ然レトモ普通西國普通國法典ハ動產ト不動產トノ間ニ區別ヲ設タルコトナク質借權ニ物權ノ性質ヲ與ヘ總テノ第三者ニ對シテ且隨テ質貸人ノ特定承繼人ニ對シテモ遂行シ得ヘキ權利ヲ與ヘ質貸物件ノ引渡アリハ登記簿ニ登記スルコトヲ要セスシテ物權的效果ヲ生スルコトト爲リ居リ裁判上ニ強制ノ讓渡

場合ニ於テハ質借人ハ一定ノ期間後ニ物ヲ引渡スヘキコトト爲リ居タリ佛國民法第七百四十三條モ賣買ハ質貸借ヲ破ラサルノ原則ヲ探レトモ前者ト其規定ヲ異ニシ土地並ニ家屋ニ付テノミ此原則ヲ認メ且質借人カ公正ノ質貸證書又ハ日附ノ確實ナル質貸證書ヲ有スルトキ換言スレハ質借人カ相當ノ證據ヲ以テ取得者ニ對シ讓渡契約ノ成立以前ニ質貸借ノ存立スルコトヲ立證シ得ルトキニ限り新取得者ハ該質貸借ニ羈束セラレヘキモノトス但同國千八百五十五年三月二十二日ノ法律第二條ハ十八年ヲ超ユル質貸借契約ハ之ヲ登記スルニ非サレハ第三者ニ對シ效力ヲ生セサルモノト定ム然レトモ質貸借契約中ニ讓渡ヲ質借人ニ對抗セシメ得ヘキ權利ノ留保セラレルトキハ質借人ハ新取得者ニ步ヲ讓ラサルヘカラサルモノトス但後者ハ一定ノ豫告期間ヲ遵守セサルヘカラス且質借人ハ契約ノ期間前ニ解除ヲ受クルニ基キテ定アル法定ノ損害賠償ヲ質貸人若クハ新取得者ヨリ受クルマテハ物ノ利益ヲ享受スルコトヲ得次ニ契約ニ日附ノ確定ノ缺クル場合ニ於テハ取得者ハ質借人ニ對シ契約ヲ解除シ豫告期間ノ經過後物ノ引渡ヲ求ムルコトヲ得然レトモ佛國法ハ普漏西

法ト異ナリ強制競賣ノ場合ニ付キ例外ヲ設ケス佛國法ノ規定ハ又其儘バーデシ國ノ法典ニ採用セラレタリ之ヲ第二種ノ法制トス
以上二類ノ法制ヲ調和シタルモノハ奧國、索通國、瑞西國等ノ法典ニシテ此等ノ法典ハ獨逸普通法ニ倣ヒ契約期間内ト雖モ質借人ニ物ノ引渡ヲ求ムルノ權利ヲ取得者ニ付與スレトモ唯不動産又ハ或種ノ不動產土地家屋ノ質貸借ニ付キ解除ヲ豫告シ且法定ノ期間ノ經過後明渡ノ義務アリト定メラル然レトモ以上ノ法制ニ於テモ瑞西ヲ除キテハ質借權ノ登記ヲ認メ且之ニ契約ノ全期間爾後ノ取得者ヲ質貸借契約ニ羈束スルノ效力ヲ付與ス就中奧太利民法第九十五條ハ契約カ登記簿ニ記載セラレタルトキハ質借人ノ權利ハ之ヲ物權ト看做スヘク而シテ其殘存スル期間ハ後ノ占有者ニモ對抗スル旨ノ定アリ
按スルニ羅馬法並ニ獨逸普通法ニ於テ然リシカ如ク賣買ハ質貸借ニ勝ツテフ原則ヲ極端ニ認ムルコトハ人民ノ大多數カ質貸借ニ依賴シ居ル今日ノ事情ニ適當セス然レトモ普漏西法佛蘭西法ニ於ケルカ如ク質借人ハ登記ナシニ土地ニ付キ物權ヲ取得シ質貸物件ヲ讓受ケタル者ハ登記簿ノ示ササル質借權ヲ認

メサルヘカラストスルハ不動産登記ヲ認ムル原則ト一致セス即チ占有ノ取得ニ依リ物ニ關スル權利カ物權ト爲ルトノコトハ物權ニ關シテ認メラルル原則ト一致セサルカ故ニ採用スヘカラス之ニ反シテ新ニ物ヲ取得シタル者ニ對スル賃借權ノ效力ハ登記簿ニ登記スルニ依テ生スヘキモノトセハ登記法ヲ認ムルノ原則ニ相背馳セサルヘシ但登記ヲ認ムルニ付テモ登記ハ之ニ依リテ物權ノ性質ヲ付與シ隨テ賃貸人ノ特定承繼人全體ニ對シテ賃借權ヲ主張シ得ヘキモノト爲スコトヲ得ヘク又ハ索還法典第二百二十四條ノ如ク所有者タル賃貸人ノ處分權ヲ制限スルノ效力ヲ登記ニ付與シ登記官廳ハ賃借權ノ存續スル間ハ賃借人ノ權利ヲ留保セサル讓渡ヲ登記セサルモノトスルコトヲ得ヘシト雖モ此方法タルヤ賃貸人ノ處分權ヲ制限スルコト甚大ニシテ本來ノ目的ヲ超越テ制限ヲ加フルノ嫌ナキニ非サルヲ以テ第一方法ヲ以テ勝レリトスヘシ總理ヨリ言ヘハ賃貸借契約ハ債權債務ノ關係ヲ生スルニ止マルコト羅馬法以來認メラルル所ニシテ之ヲ以テ當事者以外ノ第三者ニ對抗シ得サルヲ原則トス然レトモ若シ此ノ如クナラハ一旦賃貸借契約ノ成立シタル後賃貸人カ其目

的物ヲ第三者ニ讓渡シタル場合ニ於テハ賃借人ハ救済ヲ得サルニ至ルヘキヲ以テ取引ノ必要上賃借權ヲ第三者ニ對抗セシメ得サルヘカラス是レ或ハ賃貸借契約ヲ以テ物權ヲ生スト爲ス者アル所以ナリ然レトモ賃貸借カ債權ヲ生スルニ過キサルコトハ羅馬法以來認メラルル所タルコト上陳ノ如クニシテ其之ヨリ物權ヲ生スルモノト爲スノ必要モ畢竟其權利ヲ以テ第三者ニ對抗セシメントスルニ外ナラサルヲ以テ沿革並ニ性質ヲ無視シテ之ヲ以テ物權ナリトスルノ必要ヲ見ス且不動産ノ利用ヲ目的トスル場合ニ於テハ登記ニ依リ之ヲ公示シ得ヘク隨テ之ヲ第三者ニ對抗セシムルモ不慮ノ損害ヲ被ラシムルコトナキヲ以テ本法ハ取引ノ必要實際ノ便宜上不動産ノ賃貸借ニ限り之ヲ登記シタルトキハ爾後其不動産ニ付キ物權ヲ取得シタル者ニ對シテモ其效力ヲ生スル旨ヲ定ム(第六〇五條獨逸民法モ其第一草案第五百九條ニ於テハ賣買ハ賃貸借ニ勝ツヲフ原則ニ從ヒシカ實際ノ必要ト普漏西國普通法典ト佛國民法カ既ニ反對ノ原則ヲ採リ居ルテ事實トニ鑑ミ其原則ヲ改メ民法典第五百七十一條ハ賃貸ノ目的タル土地ヲ賃貸人ヨリ賃借人ニ引渡シタル後之ヲ第三者ニ讓渡

シタルトキハ取得者ハ其所有權ノ存續間質貸借關係ヨリ生ズル權利義務ニ付
キ質貸人ニ代ル旨ヲ定ム而シテ登記ノ效力ハ其登記ノ前後ニ依リ其順位ヲ定
ムヘク其效力ハ將來ニ向ヒテノミ之ヲ生ズルヲ本則トスレトモ本法ハ第六百
二條所定ノ期間ヲ超エサル質貸借ハ抵當權ノ登記後ニ登記シタルモノト雖モ
之ヲ以テ抵當權者ニ對抗シ得ヘキモノト定ム(第三九五條)

次ニ動産ニ付テハ獨逸民法第九百二十九條ノ如ク動産ノ所有權ノ移轉ニハ必
ス占有ノ移轉ヲ要ストセハ質貸借ニ在リテハ多ク質借人ニ於テ既ニ動産ヲ占
有スルノ結果所有者ニ於テ更ニ之カ所有權ヲ第三者ニ移轉スルコト能ハサル
ヘク別段ノ規定ヲ要セス我民法ハ同法ト其規定ヲ異ニスモ動産ニ付テ特
ニ質借人ヲ保護スルノ規定ヲ要セサルコト亦右ニ同シカルヘシ(第一七八條)

第三款 土地ノ用益質貸借ニ於ケル特別規定

收益ヲ目的トスル土地ノ質貸借ニ於テハ洪水降雹旱魃等ノ如キ非常ノ災害ニ
因リ收穫ニ非常ノ減少ヲ來スコトナキニ非ス此ノ如キ場合ニ於テモ契約ヲ以

電信ノ官業ニ付テハ其建設修繕等ニ要スル經費ノ巨額ニシテ監理ノ統一ニ伴
フ節約高比較的ニ少ク發信ノ費用ハ其全費用ノ大部分ヲ組成シ而モ此費用ハ
事務ノ増進ニ伴ヒテ迅速ニ増加ヲ來スヲ以テ學說實際共ニ政府ノ官業ニ對シ
多少ノ非難ナキニ非サレトモ政府カ郵便ノ事業ト結合スルニ因リ著シク經費
ヲ節減スルコトヲ得ヘク又其普及確實等ノ點ニ於テ官業ト爲スヘキ理由ハ郵
便ニ於ケル場合ト大體ニ於テ異ナルコトナク殊ニ郵便電信ヲ通シテ官業ト爲
スヘキ特種ノ理由ハ信書ノ秘密ニ在ルコトハ曩ニ一言セル所ナリ即チ政府カ
信書ノ秘密ヲ保證スヘキ理由ハ政府及ヒ人民ニ對シ各積極及ヒ消極ノ兩面ヲ
存セリ換言スレバ政府及ヒ人民ノ信書ノ秘密殊ニ政府ノ通信ノ秘密ヲ保證ス
ルト同時ニ一方ニハ公安ノ爲メ其他國家ノ生存上信書送達ノ停止ヲ爲スコト
ヲ要ス然レトモ電信ヲ官業ト爲スモ專有權ノ絕對ニ認ムヘカラサルハ郵便ノ
場合ト異ナルコトナシ但電信ハ巨額ノ固定ニシテ且不動ナル資本ヲ投下スル
モノナルカ故ニ之カ監督取締ノ容易ナルハ郵便ノ場合ト全ク相反シ又性質上
經濟上郵便ノ場合ノ如ク之カ機關設備ノ普及ヲ望ミ難キヲ以テ其除外例ノ範

國ハ信書郵便ノ場合ニ比シテ勢ヒ廣潤ナラサルヲ得ス今各國ノ立法例ニ徴スレハ大體ニ於テ官設主義ニ三種ノ區別存スルヲ見ルヘシ即チ第一、最狹義ノ官設主義ハ公安上電信ノ私設ヲ政府ヨリ強制スヘキ性質ヲ有スルモノ例ヘハ鐵道事業ニ伴フ電信ノ如キモノニ付テ之カ私設ヲ認メ第二、狹義ノ官設主義ハ最狹義ノ私設線ヲ認ムルノ外向ホ公安ヲ害セサル範圍内ニ於テ專用ノ私設線ヲ認メ第三、廣義ノ官設主義ハ狹義ノ官設主義ヲ認ムルノ外向ホ公安ヲ害セサル範圍内ニ於テ公衆用ノ私設線ヲ認ム勿論此等何レノ主義ニ通スルモ施設ノ地域、用務ノ性質及ヒ設備ノ主體ヲ標準トシテ幾多ノ制限ヲ附スルニ於テハ一ナリトス此等ノ主義ニ付テハ時ト處トニ依リ皆其事情ヲ異ニスルヲ以テ固ヨリ絕對ニ之カ可否ヲ論スヘカラス

第三節 鐵道

鐵道ハ國有ト爲スヘキカ民有ト爲スヘキカハ理論ニ於テ實際ニ於テ普ク論究セラレ而モ今日ニ至ルマテ未タ歸一スル所アルヲ見ス予ノ見ル所ヲ以テスレ

ハ國有民有ノ兩論者ハ其ニ其論スル所極端ニ失スルノ嫌疑カラザルノミナラス時ト處トニ依リテ其間ニ重要ナル差別ヲ生スヘキコトヲ看過セルモノノ如シ
國有論者ハ常ニ經濟上及ヒ財政上ノ點ヨリ民有鐵道ヲ批難スルヲ例ト爲セリ然レトモ經濟上及ヒ財政上ノ理由ハ常ニ時ト處トニ依リテ著シク其效果ヲ異ニスルノミナラス在來ノ實例ニ徴スレハ事實カ却テ國有論者ニ對シ反對ノ立證ヲ爲スモノ渺シト爲サス經濟上ノ理由トシテ國有論者ノ唱道スル論點ハ鐵道ハ自然的獨占事業ニシテ公共的ノ性質ヲ有ス故ニ之カ布設ハ全國ニ普及シテ一般交通ノ利便ヲ達シ政府ノ手ニ歸一シテ確實ナル監督ノ下ニ運賃ノ低廉及ヒ人頭貨物輸送ノ確實ヲ期シ事業ノ經營ニ對シテ統一ト公平ヲ持シ人頭貨物輸送危險ノ擔保鐵道事業ニ從事スル勞働者ノ保護等ノ完全ヲ期スルコトヲ得ヘシト爲スニ在リ財政上ノ理由トスル所ハ鐵道事業ノ統一ニ依リテ郵便電信ノ官業ニ結合シ以テ國庫ノ收入ヲ増加シ以テ間接ニ國民ノ負擔ヲ輕減スルハ財政上一舉兩得ノ政策ナリト云フニ在リ

然レトモ先ツ國有鐵道ト民有鐵道ト果シテ孰レカ經濟上ノ效果ヲ奏セルヤ國有鐵道ハ果シテ國庫收入ノ財源タルヤヲ事實ニ於テ確證セズンハアラス予輩ハ前提トシテ第十九世紀ノ國家ハ各國ヲ通シテ日ニ月ニ經費ノ増加ヲ促シ殊ニ軍事上ノ經費ハ國家支出ノ大部ヲ占メ歐米ノ列國ニシテ爲メニ財政ノ困難ヲ感セサルモノナク隨テ政府ハ當ニ歲計上新ニ鐵道ヲ建設シ又ハ既設ノ民有鐵道ヲ買上クヘキ餘裕ヲ存セサルノミナラス皆公債ノ募集租稅ノ新設及ヒ増率ニ依リ漸ク財政ノ維持ヲ爲スモノナルコトヲ認知セスンハアラス既ニ此ノ如キ政府ノ下ニ於テ鐵道ノ普及ハ果シテ豫期スルコトヲ得ヘキヤ鐵道運賃ノ低減ハ果シテ豫期スルコトヲ得ヘキヤ佛蘭西カ七大鐵道ノ國有計畫ヲ立テテ面モ其六大線路ハ達ニ之ヲ民有ノ手ニ委テシハ世人ノ知ル所ナリ白耳義ハ鐵道國有ノ嚆矢ニシテ爾後新設ノ私設線ニ對スル競爭ニ堪フルコト能ハサルカ爲メ此等私設線ノ大部ヲ買收シ結局鐵道ノ收入ハ公債ノ利子ヲ償フニ至ラス千八百八十三年ニハ純收入四千八百五十萬フランク鐵道公債ノ利子二千五百萬フランク差引四百萬フランクニ近キ不足ヲ生シ爲メニ却テ運賃ヲ引上クル

ノ窮策ニ出テ向ホ今日公債ノ利子ヲ償フニ汲汲タルハ又吾人ノ見ル所ナリ此ノ如ク鐵道ノ純收入ヲ以テ鐵道公債ノ利子スラモ償却シ能ハサルハ獨リ白耳義ニ止マラス佛蘭西奧地利匈牙利利「ブラジル」智利濠太利亞「バーデン」「バーリヤ」ノ如キ皆然ラサルハナク加奈太及ヒ印度ノ如キハ官有鐵道ノ收入ハ其事務費スラモ支フルコト能ハサルコトアリ即チ加奈太ノ如キハ一千八百八十六年ニ於テ不足額十八萬弗翌年ハ三十一萬弗ニ上リ別ニ五千萬弗ノ鐵道公債ヲ負擔シ又印度ノ如キハ一千八百八十九年度ニ於テ一億六千一百萬「ルービー」收入ニ對シ一億八千七百萬「ルービー」支出ヲ爲セリ此ノ如ク國有鐵道カ民有鐵道ニ比シテ支出超過ノ實況ヲ示スハ民設會社ハ目前ノ私利ヲ營ムニ急ナルノ餘之カ經費ノ上ニ於テ無謀ノ削減ヲ加ヘタルノ嫌ナキニ非スト雖モ此等ハ一方ニ於テ官有鐵道ニ於ケル官廳流ノ冗費多キニ過クル弊害ト相殺スルコトヲ得ヘケレハ少クトモ國有鐵道論者カ財政上ノ理由トシテ主張スル所ハ却テ反對ノ立證ヲ爲スモノト謂ハスンハアラス而モ此結果ヲ來セルハ官有鐵道カ鐵道ノ普及ヲ計ルカ爲メ比較的利益少キ地方ニ鐵道事業ヲ起シ又ハ運

賃ヲ輕減シタルカ爲メニ生シタルモノニ非サルノミナラス却テ運賃ノ引上ヲ行ヒシ實例アルヲ見レハ民有鐵道ハ國有鐵道ニ比シテ却テ經濟上優勝ナルモノト謂ハスンハアラス此ノ如キハ我國其他歐米各國鐵道ノ實況ニ徴スルモ亦敢テ之ヲ解スルニ難シト爲ササル所ナリ

世人動モスレハ國有鐵道トシテ成功シタル普漏西ノ實例ヲ取リテ直チニ今日ノ我國ニ引證セントスルハ一ノ希望トシテハ可ナルモ經濟政策トシテハ時ト處トヲ顧ナルノ甚シキモノト謂ハスンハアラサルナリ況ヤ普漏西鐵道其モノハ國有論者ノ唱フルカ如キ實功ヲ奏シタルモノニ非サルニ於テヤ「ビスマーク」カ私設鐵道買取法案ヲ議會ニ提出セシ理由ハ要スルニ鐵道ヲ國有トシテ私立會社ノ迷想ヲ去リ私利ニ走ラス公益ヲ圖リ業務ヲ改良シ運賃率ヲ低減シ且之ヲ簡單ニシ人民ノ便益ヲ進メ收益ヲ以テ速ニ鐵道公債ヲ償却シ爾後國庫ノ爲メニ莫大ナル財源ヲ開クヘシト云フニ在リ當時政務委員ハ運賃率ノ低減ヲ以テ重ナル理由ト爲セリ然レ私立會社ハ收益ノ精神ニ支配セラレテ唯配當ノ多カラシコトヲ望ミ業務ノ改良運賃ノ低減ヲ欲セス唯政府ノミ善ク公益ノ爲メ

ニ鐵道ヲ使用スルコトヲ圖リ獨リ其資本ノ使用其當ヲ得テ經濟ニ適スルノミナラス全ク私利ノ念ナキカ故ニ鐵道ヲ以テ一國繁榮ノ手段ト爲シ事業ノ經濟ヲ圖ルト共ニ常ニ線路ヲ擴張シ業務ヲ改良シ運賃率ヲ低減スヘシト明言セリ然ルニ買取後ノ政府ハ當ニ運賃率ノ低減ヲ爲ササルノミナラス却テ千八百七十四年六月及ヒ翌年二月ノ布告ヲ以テ在來ノ運賃率ノ百分ノ二十マテ増加シ得ヘキコトヲ公示セリ而シテ尙ホ運賃率算定ノ標準ヲ一ニシテ各地方ニ於ケル異同ヲ廢シ一般ノ利益ヲ圖リシハ所謂私利ニ專ナル私設會社ヨリ成レル鐵道運賃率協定同盟會ノ千八百七十六年「アイブチ」會ノ決議ニ基キシモノニシテ政府ハ單ニ之ニ賛同セルニ過キス其後政府ニ對シテ議會及ヒ新聞紙等ニ於テ屢ニ運賃率低減ノ請求ヲ爲セシモ政府ハ之ニ應スルコトナク鐵道ノ純收入ハ鐵道運賃ノ利子ヲ控除シテ尙ホ二億萬マルクニ近キ剩餘ヲ生スルニ拘ハラス年年殆ト其全部ヲ舉ケテ政府ノ歲入總豫算ニ編入シタリ而シテ一方ニハ私設線買取以後ノ政府ノ營業費ハ從前民有ノ場合ニ比シテ却テ増加セルハ「コロニユーミンデン」鐵道ライン鐵道等ニ於テ之カ實例ヲ示スノミナラス之ヲ獨

逸及ヒ佛蘭西ニ於ケル私設會社ノ鐵道ト比較スルモ其輸送額ノ比率遙ニ多キニ拘ハラス經費ノ割合ハ常ニ平均百分ノ三乃至四ノ超過ヲ生シタリ予輩ハ固ヨリ普滿西ノ國有鐵道ハ鐵道官業トシテ最モ好成績ヲ舉ゲシモノタルコトヲ認ムル者ナリ然レトモ千八百八十年乃至千八百九十年ニ至ル國有鐵道經費ノ減少ハ總經費ノ百分ノ八ヲ占メタル石炭ノ價格ノ半減鐵道ノ統一ニ基ク經費ノ節約ノ外ニ工務大臣「ノーバック」ノ極端ナル射利主義ニ由リ使用人ヲ減少シ線路車輛等ノ保存維持ニ注意セス一方ニハ此等ノ修繕改良ノ費用ヲ臨時費ニ転入レテ借入勘定ト爲シ又中央鐵道廳ノ經費其他鐵道使用人ノ恩給費等ヲ他ノ官廳ノ經費ニ轉嫁シ形式ニ於テ假面的ノ收入ヲ増加シタルノミナラス此等ノ純收入ノ使途ハ千八百八十二年ノ法律ニ依リ第一鐵道公債利子ノ支拂第二、政府ノ經常豫算ニ於テ歳入ノ不足セル時二百二十萬マルクマテノ補助第三、鐵道公債ノ償却ニ充ツヘキコトト爲セシモ鐵道公債償却ノ割合ヲ毎年百分ノ〇・七五ニ限リ且其償却ハ第一千八百七十九年以前ノ鐵道舊公債ノ償却第二、政府總豫算ノ歳入不足ノ補充第三、無期公債ノ買收ヲ爲シ向ホ殘餘アル場合ヲ條件

ト爲セルヲ以テ殆ト之カ實行ヲ見ルコトナク年年三千萬フランク乃至一億五千萬フランクノ金額ハ常ニ總豫算ニ編入セラルルニ至レリ是レ前ニ政府カ民有會社ニ對シテハ準備積立金及ヒ公債償却資金トシテ總收入ノ百分ノ四三五四ヲ控除セシメシ精神ト買收後ノ政府カ自ラ鐵道總收入ノ巨額ナルニ拘ハラス之カ設備經營費率ノ遞減鐵道公債元金ノ償却ヲ後ニシテ殆ト其全部ヲ總豫算ニ編入セル實蹟ニ照應スレハ所謂民設會社カ配當ノ多少ヲ先ニシテ設備經營ノ要務ヲ後ニスルノ非難ハ均シク國有鐵道ノ場合ニ於テモ亦之ヲ免ルルコト能ハサルヲ見ルヘシ

之ヲ要スルニ鐵道ノ國有ハ民有ノ場合ニ比照シテ直チニ之カ是非ヲ論斷スヘカラス然レトモ少クトモ一般國有論者ノ唱道スル鐵道ノ普及設備經營ノ完備資金ノ低減ノ如キハ現時各國財政ノ趨勢ニ徴スルモ其最モ成功セル普滿西國有鐵道ノ實況ニ照スモ事實不能ノ場合多ク又稀ニ可能ノ場合アルモ之ヲ實行スルコトナカルヘキハ蓋シ何人ト雖モ首肯スル所ナルヘシ國有ニ依リテ經濟上、財政上所謂國有論者ヲ唱フルカ如キ所說ノ實行ヲ待タントスルハ時勢ヲ思

ハサルノ甚シキモノナリ然レトモ國有論者カ唱フルカ如キ所說ハ之ヲ論外ニ置キ國有ト民有トハ經濟上果シテ孰レカ優レルカ試ニ我國鐵道統計明治三十二年度ノ一部ヲ舉ゲテ之カ資料ノ一端ニ供スル所アルヘシ

線路名	一哩平均建設費	一日一哩二對スル平均營業收入	一日一哩二對スル平均營業費	營業收入百圓ニ對スル營業費
官設線	八一三八八	四四四	二五四	五六四
日本鐵道	四九五九一	二四四	一四四	六一
山陽鐵道	六五五五四	二七	二二	四四
九州鐵道	七二五四二	三五	二〇	五六
關西鐵道	八五三一三	一九	一一	六〇
甲武鐵道	六五五四一	四二	一一	五〇
北海道炭礦鐵道	三三三七	一九	一一	六三

上達ノ表ニ於テ官設線ハ建設費ニ於テ著シク巨額ヲ要セルヲ見ルヘシ線路ノ難易ト經營ノ主體ノ異ナルコトハ固ヨリ重大ナル原因ナリト雖モ事實ニ於テ官設線ハ民設線ニ比シテ其建設ニ多額ノ費用ヲ要セルハ明カナリトス又營業費ニ於テモ官設線ノ著シク多キヲ乘客貨物ノ數量ノ多寡線路車輛ノ良否經營

ノ主體ノ異ナルコトモ固ヨリ重大ナル原因ナリト雖モ官設線ハ民設線ニ比シテ線路ノ保存修繕車輛ノ運轉保存修繕旅客貨物ノ取扱等ニ多額ノ費用ヲ要セルハ明カナリトス上述スル所ノ統計ト我國實際ノ鐵道ノ現狀ト相照應スレハ所謂自利ノ觀念ハ常ニ利害ノ相隨伴スルコトヲ知ルヘシ蓋シ人類ハ皆自利ノ觀念ヲ根底トシテ立ツモノナリ而シテ經濟上ノ自利トハ人類各自カ貨財ヲ收得セントスル欲望ヲ指スモノナリ故ニ自利ノ觀念ハ利害關係ノ密接ナルニ隨ヒ益強ク又競爭ニ因リテ最モ良ク之カ刺激ヲ感スルモノナリ民設會社ノ營利ニ急ナルハ固ヨリ官設ノ及フ所ニ非ス是レ一方ニハ民設ニ於テ允費少キト共ニ設備經營ニ周密ナラス一時ノ收益ニ急ナル所以ニシテ一方ニハ官設ニ於テ允費多カルヘキト共ニ之カ設備經營ニ周密ナル所以ナリトス然レトモ均シク營利的事業ナル以上ハ其競爭ニ因リテ之カ設備經營ニ於テ其發達ヲ見ルハ固ヨリ自然ノ理ナリ世人カ現ニ陸上ノ競爭ヲ受クル關西大阪ノ諸鐵道海運ノ競爭ヲ受クル山陽鐵道ニ於テ事實見ル所ニシテ競爭ノ刺激ニ因ル事業ノ發達進歩ハ又其經營者ノ公私ヲ問ハサルモノナリ

予輩ハ上來總述スルカ如ク經濟上財政上國有鐵道ノ利害問題ハ常ニ時ト處トニ依リテ之カ是非ヲ決定セスヤアラス民設ノ鐵道ヲ買收シテ其純收入國庫ノ總收入ノ半以上ヲ占ムル普漏西ノ如キアレハ收支相償ヘサルカ爲メニ國有鐵道ヲ民設會社ニ賣下ケ又ハ貸下ケヲ爲ス伊太利「ブラジル」ノ如キアリ予輩ハ固ヨリ我國ノ如キハ伊太利「ブラジル」等ノ失態ニ陷ルコトナキヲ信スルト共ニ又私設鐵道ノ買收ニ依リテ直チニ普漏西ノ如キ效果ヲ奏スヘシト豫期スルハ少シク臆斷ニ失スルノ疑ナシト爲ササルナリ

予輩カ鐵道國有ヲ主張スルハ經濟財政ノ點ニ在ラスシテ政治上ノ點ニ在リ鐵道ハ公共事業ニシテ而モ自然的獨占事業ナリ事業其モノノ性質ハ所謂經濟上ノ自由競爭ヲ許スモノニ非ス鐵道事業ニ對スル放任政策ハ事實ニ於テ競爭ヲ生スヘシ然レトモ自然的獨占事業ヨリ生スル競爭ハ永久ニ繼續シテ貨財ノ生産ヲ發達スヘキ所謂經濟上ノ自由競爭ニ非スシテ唯一時ノ幻影トシテ經濟界ヲ擾亂スル爭鬭ナリ先年「グリフィン」氏カ鐵道「トラス」トノ關係ニ付キ演說セル一節ニ「一ノ國家ノ下ニ於テ競爭カ一定ノ程度ヲ超エテ發達スルトキハ結

局最モ優勢ナル專占權ヲ生スルモノナリ今日最モ自由主義放任主義ノ發達セル亞米利加合衆國ニ於テ優勢ナル專占事業ノ發生ヲ見ルニ至リタルハ亦競爭ノ一定ノ程度ヲ超エテ發達セル結果ニ外ナラスト云ヘリ當ニ理論上ノミナラス實際ニ於テ英米其他歐洲大陸ヲ通シ鐵道ノ發達ニ伴フテ優者兼併ノ趨勢ヲ呈スルハ鐵道ノ歴史ニ徴シテ明カナル所ナリ我國ニ於テモ兩毛鐵道ノ日本鐵道ニ合併シ筑豐ノ九州鐵道ニ合併シ又近時房總總武二鐵道關西大阪南和河陽ノ四鐵道道後伊豫南豫宇和島ノ四鐵道等ニ於テ合併談ノ相繼ギテ起ルハ又其自然的獨占事業ノ實相ヲ現ハスニ至リタルモノナリ此ノ如ク貨財ノ生産分配ニ對シ經濟上至大ノ勢力ヲ有スル鐵道カ其兼併ノ趨勢ニ伴フト共ニ之カ實權ヲ少數ノ私人ノ私利ニ委スルハ政治上最モ忌ムヘキノミナラス社會政策上害毒之ヨリ大ナルハナシ近時英米等ニ於テ當路ノ局ニ在ル者屢鐵道國有ノ會議ヲ開キ又鐵道國有ノ已ムヘカラサル所以ヲ說ク者亦一ニ此原由ニ外ナラス又鐵道國有ニ對スル軍事上ノ理由即チ鐵道網ノ成形線路ノ選擇軍事ノ輸送ニ對スル設備鐵道隊ノ編成及ヒ訓練國法上ニ對スル負擔ノ義務外人ノ鐵道占有ニ

對スル危險等ニ於テ國有ヲ以テ優レリト爲スハ言フ埃タサル所ナリ
之ヲ要スルニ鐵道國有ハ政治上軍事上之カ實行ヲ期セスハアラス若シ其建
設買收及ヒ經營ノ方法ニシテ其宜キヲ得ハ併セテ經濟上財政上ノ效果ヲ收メ
得ヘキコト亦言フ埃タス唯現時各國ノ財政益膨脹ヲ告クルノ際鐵道其モノノ
普及ハ政府單獨ノ行爲ニ依リテ固ヨリ期シ能ハサル所ナリ隨テ一方ニ於テハ
自ラ鐵道ノ建設及ヒ經營ニ當ルト共ニ一方ニ於テハ既設ノ私設鐵道ノ買收ニ
對スル方法及ヒ私設ノ新設認可ニ對シ國有歸屬ノ法ヲ執リ以テ鐵道ノ完成ヲ
期セスンハアラス故ニ今日ノ問題ハ鐵道國有ノ可否ニ非スシテ如何ナル方法
ニ依リテ新設ノ私設線ニ對シ國有歸屬ノ實ヲ舉クヘキヤ又財政ノ緩急ニ應シ
如何ニシテ既設鐵道ノ買收ヲ爲スヘキヤニ在リ
終ニ臨ミ鐵道國有歸屬法ノ實例タル佛蘭西鐵道ノ大體ノ沿革ヲ述ヘ以テ本節
ヲ終ルヘシ

佛蘭西政府ハ千八百四十二年ノ法律ヲ以テ營業期限ヲ四十五年ト爲シ期限
ノ滿了ト共ニ國家ノ手ニ歸屬スヘキコトヲ規定シタリ其後期限ノ延長及ヒ利

子ノ補給ニ依リテ鐵道ノ布設普及ヲ獎勵シ普佛戰爭以後政府ハ鐵道ノ改良設
備最モ急ナルヲ感シ新ニ新設官有鐵道ノ大計畫ヲ立テシモ到底之ニ要スル巨
額ノ資本ヲ得ルニ難キヲ以テ千八百八十三年七大幹線中重ナル六線ヲ民設會
社ニ經營セシメ千八百八十五年ノ如キハ純收入僅ニ四百萬フランニ止マリ建
設資本ノ利息四千萬フラン一割ニ過キササルノミナラス其會社ニ支給スル補
助金ニ至リテハ著シク巨額ニ達シ千八百六十七年ヨリ同七十一年マテノ八年
間ニハ二億九千萬フランノ多キニ上リタリ然レトモ政府ノ純收入ハ漸次遞増
スルト共ニ千九百五十年乃至千九百六十年ノ間ニ於テ一萬二千哩ニ近キ鐵道
ハ無償ヲ以テ國家ノ手ニ歸屬スルカ故ニ無謀ナル買收方法ニ依リ鐵道公債其
モノノ利子スラモ補給スルコトヲモ得サル不確定ナル手段ニ比スレハ却テ簡
單ニ且確實ナルモノト謂フヘキナリ

第四章 手數料

第一節 手數料ノ概念

財政學 收入論 有價收入 手數料 手數料ノ概念

手数料ナルモノハ收入ノ一項目トシテ認ムヘキモノナルカ又之ヲ認ムルトセハ其性質範圍ハ如何ニシテ定ムヘキモノナルヤ今日ニ至ルマテ殆ト説ノ歸スル所ヲ知ラス歐米各國ヲ通シテ手数料ナルモノヲ法規ノ上ニ於テ認メタルモノハ獨逸奧太利等ノ數箇國ニ過キス我國ニ於テハ憲法第六十二條第二項ニ於テ報償ニ屬スル行政上ノ手数料及ヒ其他ノ收納金ハ法律ヲ以テ定ムル限ニ在ラサルコトヲ規定シ手数料ナルモノハ報償ニ屬スルモノナルコトヲ半面ヨリ示スト其ニ租稅公債等ニ比シテ財政上緊要ナル事項ニ非サルコトヲ反證セリ然レトモ茲ニ所謂手数料ナルモノハ固ヨリ憲法第六十二條第二項ニ示セル手数料ト其實質ヲ一ニセサルノミナラス又豫算雜收入ノ一項タル手数料ト全然其性質範圍ヲ一ニスル所アルナシ各國ノ學說立法例ニ於テモ手数料トシテ認メラルモノハ或ハ租稅トシテ認メラレ或ハ有價收入トシテ認メラレ其所管ノ職制ニ於テ一定スル所ナク其豫算ノ種類及ヒ款項ニ於テ區區ニ岐レ其收入ノ國庫官吏又ハ公吏ニ歸屬スル等複雜ヲ極ムルニ於テハ皆異ナル所アルナシ」手数料ナル觀念ハ「ハインリヒ・ラウ」ニ於テ始メテ研究セラレタルコトハ財政學

史ノ下ニ於テ述ヘタル所ナリ今其性質範圍ヲ述フルニ先チ之カ大體ノ沿革ヲ略述スヘシ
手数料ノ發生ハ國家ノ事務漸次複雜ヲ極メ自ラ專門ノ技能ヲ要スルニ至レル時ニ在リ殊ニ司法及ヒ教育ノ事務ニ於テ然リトス裁判ノ事務ハ古代ヨリ國家ノ事務トシテ認メラレシモ事實之カ執行ノ衝ニ當リタル者ハ一私人ナリシヲ以テ各自其報酬ヲ受タルヲ例ト爲シタリ第十七世紀ニ至リ裁判機關ノ設備成ルヤ裁判官ヲ設ケ所謂手数料ナルモノハ直チニ裁判官ノ俸給トシテ交付セララルニ至レリ其後裁判ノ爲メニ要スル文書其他證書等ニ付テハ必ス政府ノ製造ニ係ルモノ或ハ政府ノ規定ニ從ヘルモノニ限ラレ印紙ヲ貼用スルコトヲ條件トシ證券印紙ノ制度ハ手数料以外ノ場合ニ於テモ汎ク行ハルルニ至レリ之ト同時ニ手数料ハ財政學上國庫ノ收入タルヘキモノナリトシ裁判官ノ手数料受領ノ制廢止セラレ第十九世紀ニ至リテ全國ヲ通シテ國庫ニ所屬スル一定ノ手数料制度行ハレ手数料ハ行政爲ノ報償トシテ人民ノ貴賤階級ニ因リテ差等ヲ立ツヘキモノニアラサルコト明カト爲レリ然レトモ手数料ハ一方ニ於

ヲ純然タル國家ノ行政ニ關係セザル場合ニ於テ徵收セラレルコトアリ君主特權ニ基ク收入ト見ルヘキ道路河川ノ通行料ノ如キ近時マテ手数料トシテ認メラレ一方ニハ財政上收入ノ財源トシテ同一ノ手數ニ對スル徵收額ニ付キ其事件ノ大小其事件ニ因リテ受クル利益ノ多寡手数料納付者ノ資力ノ大小ヲ標準トシテ其間ニ等差ヲ設ケ其形體ヲ租稅ニ變更スルモノアルニ至レリ例ヘハ我國ニ於ケル狩獵規則ノ免許料ハ狩獵法ノ租稅ト變更シ登記ノ手数料カ登録稅ノ租稅ト變更セルカ如シ此ノ如ク手数料ノ性質範圍ハ時ト處トニ因リテ其類ヲ異ニシ殆ト相對的ノ關係ニ依リ同一ノ實質ニシテ其形式ヲ變更スル不確定ナルモノナルヲ以テ「バスターブル」ノ如キハ手数料トハ國家ノ行為ノ偶然ノ生産物ナリ國家カ其職務執行ノ餘暇ニ生スル副産物ナリト評シテ手数料ハ之ヲ租稅ト經濟的收入ノ二部ニ編入スルコトヲ得ヘシト爲セリ

此ノ如ク手数料ノ觀念ハ最モ複雜ヲ極ムルモノナルヲ以テ之カ定義ヲ下サンコト又頗ル困難ナリ今多數學者ノ所論ヲ概括スレハ手数料トハ國家其他ノ公共團體カ其勞務ニ因リ特別ノ關係ヲ有スル私人ニ對シ徵收スル所ノ報償ナリ

ト云フコトヲ得ヘシ蓋シ國家ノ行動ハ國家全體ノ利益ヲ目的ト爲スモ其行動カ公益ヲ目的ト爲スト同時ニ特定ノ私人ニ對シテ特種ノ利害關係ヲ有スルコトアリ此場合ニ在リテハ國家ハ公益ヲ目的ト爲ス點ヨリ一般ニ賦課セル租稅等ノ收入ニ依リ之カ經費ヲ支辨スルコト固ヨリ不可ナシトスルモ特種ノ利害關係ヲ有スル私人ヨリ其實費ノ一部ヲ支辨セシムルコトハ又毫モ正理ニ反スル所アルナシ故ニ國家ハ公益ノ爲メニ爲シタル行動ニ對シ特種ノ利害關係ヲ有スル私人ヨリ報償トシテ實費以內ノ額ヲ徵收シ之ヲ名ケテ手数料ト稱ス

手数料ニ關スル大體ノ觀念ハ上述スル所ノ如シ然レトモ手数料其モノノ意義ハ獨リ公法上ノ國家行為ニ對スル報償ニ止マラス私人カ營造物ノ使用ニ對シテ支拂フ使用料ヲ包含シ所謂私法上ノ手数料ナルモノヲ認ムルモノノ渺シト爲ナス行政法學者ハ多ク手数料ノ意義ヲ解釋シテ手数料トハ私人ノ利益ノ爲メニシ又ハ私人ノ爲メニ必要ヲ生シタル國家ノ行為ニ對シ又ハ營造物ノ使用ニ對シテ私人ヨリ國家ニ支拂フ其行為又ハ使用ニ對スル報償ナリトシ所謂狹義ノ手数料ノ外ニ營造物ノ使用料ヲ認メ營造物ノ使用料中公有物ノ使用ノ如キ

別段ノ契約ヲ要セサルモノ又營造物ノ使用ニシテ使用義務ノ存在スル場合ノ如キ契約ニ基カサルモノハ公法上ノ使用料トシ政府ノ公通事業即チ鐵道郵便電信等ノ如キ營造物ヲ使用スル場合ハ其使用料納付ノ義務ハ契約ニ基クモノナルヲ以テ之ヲ私法上ノ使用料トス故ニ茲ニ私法上ノ使用料ト稱スルモノハ財政學上一般ニ政府營業ノ一種トシテ官業ニ編入セラルルモノニシテ又公法上ノ使用料中行爲ヲ要スルコトナク唯物件ノミヲ以テ足レリトスル營造物即チ公有物ノ使用料ニシテ共同ノ使用ニ對シテ支拂ハルルモノ例ヘハ道路ノ通行料又ハ河川ノ航行料都府ノ入市料ノ如キハ古來君主ノ特權ニ基ク收入トシテ盛行ハレタルモノナルモ今日ニ至リテハ各國殆ト其跡ヲ絶ツニ至リ唯公有物ノ特別ノ使用ニ對スル場合例ヘハ道路ニ於ケル露店河川ニ於ケル養魚等ノ使用ノ爲メニ支拂フ特種ノ手数料ヲ遺スニ至レルハ曩ニ國有財産ノ章ニ於テ述ヘタル所ノ如シ

政府ノ交通事業ノ收入ハ固ヨリ公權ノ發動ニ基ク收入ニアラス然レトモ單ニ國家カ國庫ナル私法上ノ主體トシテ利益ヲ目的トスル營業收入ト見ルヘキカ

國家カ國家ナル公法上ノ主體トシテ國家及ヒ公衆ノ交通ニ於ケル公益ノ保全ヲ目的トスル國家行爲ヨリ生スル收入ト見ルヘキカハ議論多キ問題ナレトモ要スルニ政府ノ交通事業ハ他ノ私經濟的收入ニ比シテ公共的ノ性質著シキハ其大部カ政府ノ專業ト爲スニ於テ之ヲ知ルニ難シトナササルナリ故ニ政府ハ一方ニ於テハ交通其モノノ改良發達ヲ企圖スルト同時ニ一方ニ於テハ多少ノ收入餘剰ヲ目的ト爲スヘキモノナリ隨テ交通事業ノ收入ハ手数料ト見ルヘキヤ否ヤノ論點ハ其公私ノ點ニ在ラヌシテ寧ロ報償ノ點ニ在リ一部ノ論者ハ國家ノ行爲及ヒ營造物ノ使用ハ私人ニ與フル利益ノ有無及ヒ大小ハ問フ所ニアラス手数料ノ報償ハ對價又ハ賠償ノ觀念ヲ以テ論スヘカラスト爲セリ固ヨリ事實ニ於テ手数料ノ額ハ常ニ其利益ト其費用ト權衡ヲ維持スルコトナキモ大體ニ於テハ其實費ヲ超過セサルヲ原則ト爲スヲ以テ交通事業ヨリ得ル收入ハ少クトモ今日ニ於テハ之ヲ手数料ト見ルヘカラサルナリ

手数料ニ應スル實費ノ算定方法ハ最モ困難ナル問題ニシテ手数料ノ額ヲ算定スル標準ハ固ヨリ國家又ハ公共團體カ特定ノ私人ノ爲メニ要シタル行爲又ハ

營造物ノ費用ノ多寡ニ依ラスンハアラス然ルニ此等ノ費用ノ價格ハ事業ニ於
 タハ又幾多ノ特別標準ニ據リテ左右セラルルモノニシテ一箇人カ其勞務ノ爲
 メニ受クヘキ利益ノ大小一箇人カ其報償提供ノ資力ノ大小國家ノ提供スル勞
 務ノ性質及ヒ其事實ノ發生カ望ムヘキコトナルヤ禁壓スヘキコトナルヤ此等
 ノ問題ハ常ニ手數料ノ額ヲ左右スルノミナラス時ニ國家收入ノ額ヲ加味スル
 カ爲メニ其實質ニ於テ租税ニ變形スルモノ尠カラサルハ疑ニ一言スル所ノ
 如シ

上來講述セル手數料ノ意義ニ就キ之カ範圍限界ヲ圖解ニ依リテ示セハ次ノ如
 シ即チ第一ノ手數料ハ最狹義ノ手數料第一及ヒ第二ノ乙ノAノ手數料ハ狹義
 ノ手數料第一ト第二ノ甲及ヒ乙ノAノ手數料ハ廣義ノ手數料第一及ヒ第二ノ手
 數料ノ全部ハ最廣義ノ手數料ナリ

第一 命令權ニ基ク行政爲ニ附帶スル手數料

手數料

甲 公有物ノ使用料
 B 共同使用料
 特別使用料

第二 命令權ニ基カサル公益手段
 ニ附帶スル手數料即チ營造物ノ
 使用料

乙 公有物以外ノ營
 造物ノ使用料
 A 契約ニ基カサル場合
 ニ於ケル使用料
 B 契約ニ基ク場合ニ於
 ケル使用料

第二節 手數料ノ分類

手數料ノ分類ハ各國制度ノ異ナルニ隨ヒ一様ニ之ヲ論スルコト能ハス然レト
 モ大體ニ於テ手數料ハ之ヲ體様二種ノ方面ニ於テ分類スルコトヲ得ヘシ

第一款 様ニ依ル手數料ノ分類

手數料ノ料額ノ性質徴收ノ方法等總テ手數料ヲ支拂フ勞務其モノノ實體ニ依
 ラサル分類ニシテ俗ニ手數料制度ト稱セラルルモノナリ之ヲ五種ニ細別スル
 コトヲ得

第一 國庫手數料及ヒ官吏手數料

財政學 收入論 有價收入 手數料 手數料ノ分類

國庫手数料トハ直接ニ國庫ニ納ムルモノニシテ又直接手数料ト稱セラル官吏手数料トハ官吏カ自己ノ計算ニ於テ所得ト爲スモノヲ謂ヒ又間接手数料ト稱セラル官吏手数料ハ國庫ノ事務ヲ二重ニ節略スルノ便益アルヲ以テ古代ニ在リテハ多ク行ハレタルコトハ前述スル所ノ如シ然レトモ國家ハ財政行政ノ整理統一改良上不可ナルノミナラス官吏ノ專横ヲ誘導シ易キヲ以テ今日ニ於テハ獨逸ニ於ケル大學教授ノ講座料公吏ノ公證料執達料等ノ稀ナル例外ヲ除キ一般ニ用ヒラルコトナシ

第二 定額手数料及ヒ不定額手数料

定額手数料トハ同種ノ勞務ニ對シ手数料額ノ一定セルモノナリ不定額手数料トハ同種ノ勞務ニ對シテ其性質大小等ニ因リテ料額ノ一定セサルモノナリ不定額手数料ハ又官吏ニ一定ノ範圍ヲ限界セル限界手数料ト一定ノ階級ニ伴フテ高低スル階級手数料ノ二種ニ分タル

第三 單一手数料及ヒ合同手数料

單一手数料トハ同一ノ事件ニ關シ其各勞務箇箇ニ付キ徵收セラルモノヲ謂

ヒ合同手数料トハ同一ノ事件全體ニ通シ箇箇ノ公務ノ多少ヲ問ハス總括シテ徵收スルモノヲ謂フ

第四 一般手数料及ヒ特別手数料

一般手数料トハ一般行政官廳ニ通シテ徵收セラル手数料ヲ謂ヒ特別手数料トハ咸官衙ノミニ付テ特別ニ徵收セラル手数料ヲ謂フ

第五 直接徵收手数料及ヒ間接徵收手数料

直接徵收手数料トハ公務執行ノ官吏又ハ手数料徵收ノ官吏カ直接ニ報償ヲ徵收スル手数料ニシテ間接徵收手数料トハ證券印紙其他ノ方法ニ依リ間接ニ報償ヲ徵收スル手数料ナリ故ニ此區別ハ主トシテ手数料ノ徵收方法ノ異同ニ依ルモノナリ直接徵收手数料ハ古代廣ク行ハレタル方法ニシテ手数料徵收ノ確實ニシテ簡便ノ場合ニ適合セシムルノ便アルモ之カ費用手數大ナルヲ以テ現時ハ巨額ノ報償ニ付キ時ニ用ヒラルニ過キサルナリ間接徵收手数料即チ證券印紙ノ制ハ國家收入ノ増加ヲ目的トシテ行ハレシモノニシテ千六百二十六年和蘭ニ於テ行ハレシ以來各國相次テ此方法ヲ採用シ延テ一般收入ノ場合ニ

適用セラレルニ至リシコトハ前節ニ於テ述ヘタル所ノ如シ此方法ハ手数料額ノ計算簡單ナル場合ニ適シ政府ハ單ニ切手ノ製造及ヒ賣下ヲ爲スニ止マルヲ以テ經費ト手数料ヲ節減シ會計ノ整理ニ便ナリトス但シ印紙證券ノ偽造變造再貼用等ノ防遏監督ニ注意ヲ要スヘキコト論ヲ俟タス明治二十三年十一月勅令印紙賣捌規則參照

第二款 體ニ依ル手数料ノ分類

體ニ依ル手数料ノ分類トハ手数料ノ反對給付タル國家又ハ公共團體ノ行動ノ實體ニ依ル手数料ノ分類ナリ之ヲ大別シテ司法手数料及ヒ行政手数料ノ二ト爲ス

第一 司法手数料

司法手数料ハ手数料中最モ早ク發達シタルモノニシテ其沿革ノ古キコトハ前ニ一言セル所ノ如シ近時司法行政ノ費用著ク増加シ手数料ハ單ニ一方ニ於テハ健訟ノ弊ヲ助長セス一方ニ於テハ救済手段ノ途ヲ杜絶セサル範圍内ニ於

テ實費ニ對シテ遙ニ低下スルヲ常ト爲スニ至レリ

司法手数料ハ再分シテ訴訟手数料及ヒ非訟手数料ノ二ト爲ス訴訟手数料ハ又司法裁判手数料ト行政裁判手数料トニ分レ司法裁判手数料ハ又更ニ民事刑事ノ二者ニ細分セラル訴訟ノ手数料ハ高額ニ失スルトキハ下級人民カ救済ノ途ヲ杜絶スルモノナレトモ其額ニシテ當ヲ得ハ特別ノ利害關係ヲ有スル當事者ニ對シテ之カ支拂ヲ爲サシムルコトハ條理ニ反セサルノミナラス傍ラ健訟ノ弊ヲ防クコトヲ得ヘシ殊ニ刑事裁判ノ如キ一般ノ人民ハ犯罪者ノ裁判費用ヲ分擔スルノ必要ヲ見サルノミナラス進ンテハ自由刑ノ刑罰ヲ設ケタル犯罪ヲシテ其監獄ニ於テ要スル費用ノ如キモ之カ實費ヲ支拂ハシムルコト必スモ不當ナリトセス唯事實ニ於テハ常ニ無資力者タルヲ例ト爲スヲ以テ刑事ノ訴訟手数料ハ常ニ收入少キノミナラス財產刑モ自由刑ニ換刑セラレテ却テ一般人民ノ負擔ヲ増スニ至ルハ各國ノ例トスル所ナリ

非訟手数料トハ國家カ司法行政ノ一部トシテ私人ノ權利ノ發生移轉消滅等法律行為ノ保證ニ對シ之カ關係人ヨリ徵收スル手数料ナリ此種ノ料額ハ其事件

ノ性質大小其他關係人ノ資力ノ多寡等ニ關聯シテ時ニ實費ヲ超過スルコト多ク又形式ニ於テモ租税ニ變形スル場合アルコトハ曩ニ一言セル所ナリ

第二 行政手数料

行政手数料ハ又岐レテ内務行政軍務行政財務行政及ヒ外務行政ニ關スル四種ノ手数料ニ細別スルコトヲ得ヘシ然レトモ茲ニハ其重要ナル内務行政手数料ノ一部ノミヲ畧述シ其他ノ行政手数料ニ至リテハ財政上自體輕易ナルモノニ屬スルヲ以テ之ヲ省畧スヘシ

(甲) 衛生及ヒ教育行政上ノ手数料 衛生上ノ手数料ハ多ク古代ノ警察上ノ手数料ニ相關聯スルモノニシテ近時衛生上ノ手数料ハ公共ノ利害關係大ナルヲ以テ漸次其跡ヲ絶ツニ至レリ

教育上ノ手数料トハ授業料受驗料學位證書等ノ手数料入退學ニ關スル手数料博物館美術館等ノ手数料ヲ包含ス其最重要ナルモノハ小學教育ニ於ケル授業料ナリ近時歐洲各國ニ於テハ小學教育ニ付キ漸次其料額ヲ減少スルノミナラス極端ナルモノハ一方ニ於テ學齡兒童ニ對シ小學校ノ就學ヲ強制スルト共

ニ漸次無月謝主義ヲ斷行スルモノアリ

(乙) 經濟上ノ手数料 經濟上ノ手数料トハ度量衡ノ檢證貴金屬ノ證認食用品ノ檢査蠶種ノ檢査海員ノ雇入工場製造場等ノ檢査土地臺帳ノ謄本等監督並ニ保證ニ關スル手数料狩獵ノ免許鑛山砂鑛等ノ探掘ノ特許或特定ノ法人ノ企圖ニ關スル特許等免許及ヒ特許ニ關スル手数料等廣ク經濟上ノ手数料ヲ包含ス

第二部 無償收入

第一章 租税ノ觀念

國家ノ課税權及ヒ人民ノ納稅義務ハ國家其モノニ對スル觀念ニ依リテ相消長ス租税ノ歴史ハ專制課稅時代ニ始マリ契約課稅時代ヲ經テ今日ノ國民義務的課稅時代ニ變遷セリ古代強者カ弱者ニ對スル實力關係ヲ以テ成立セル專制國ノ下ニ在リテハ主權者ハ人民ノ身體財產ニ對シ絕對ノ權力ヲ有シ任意ノ方法ヲ以テ人民ヨリ貨財ヲ徵收シ其賦課ノ標準稅額ノ輕重等ハ總テ唯當局者ノ德義心ト智能トヲ待ツノ外ナカリシハ希臘羅馬其他東洋諸國ニ於テ見ル所ナリ

契約課稅時代ニ在リテハ私有財産制度ノ發達人權思想ノ隆興ト共ニ自由獨立ノ人民ハ國家ニ對シテ納稅ノ義務ヲ負擔スルモノニ非スト爲シ一方ニ於テハ在來ノ租稅ノ負擔者タル奴隸又ハ從屬國ノ人民ハ次第ニ其地位ヲ變シ當時ノ主權者ノ收入ハ主トシテ敵國ヨリ獲得スル掠奪品官有財産ノ收入及ヒ君主ノ特權ニ基テ收入ニ依リ所謂絕對無償ノ徵收ハ君主ト雖モ之ヲ取テスルコト能ハス今日ノ地租ハ或ハ小作料或ハ戸料等ト同一ノ思想ニ因リテ徵收セラレタル封建時代ニ於テ見ル所ナリ隨テ國務ノ増加ト共ニ君主ハ一方ニ於テ益ノ收入ノ不足ヲ告ケ君主ハ常ニ貴族又ハ諸侯ヨリ新租稅ノ賦課徵收ノ認諾ヲ求メ爲メニ歐洲ニ於ケル所謂租稅承認權ナルモノノ權輿ヲ爲スニ至レリ其後國民ノ納稅義務國家ノ課稅權ハ國家ノ觀念ノ發達ニ伴ヒテ理論ニ實際ニ公認セラレ曩ニ租稅ノ承諾權ヲ有シタル國民議會ハ契約ニ因リテ箇箇ノ場合ニ於テ國民ノ交出ヲ承諾スルニ非スシテ國家カ其生存發達上必要ナル經費ノ種類及ヒ費額ヲ審議シ之ニ應スルノ租稅ニ協賛スルノ意義明カナルニ至レリ所謂國民義務の課稅時代ト稱スルモノ是ナリ

以上述フルカ如ク租稅其モノハ時ト處トニ因リテ幾多ノ變遷ヲ示セルカ故ニ之カ意義ニ對スル學說モ亦紛紛トシテ一致スル所ナシ專制課稅時代ニ在リテハ租稅徵收ノ權利ハ勝者ト敗者トノ關係ニ存ス殊ニ東西南洋ヲ通シテ討伐征畧ノ盛ニ行ハレタル諸國ニ於テハ租稅ハ戰勝者ノ戰敗者ニ對スル當然ノ權利トシテ認メラレタリ然レトモ討伐征畧ノ歷史少キ獨逸英吉利佛蘭西等ニ於テハ地租ノ如キハ他ノ租稅ニ後レテ發生シ今日ニ至ルマデ地租ノ稅率ハ他ノ租稅ニ比シテ比較的輕キ所以ノモノハ一ニ其手數料ニ對スル觀念ト相違キニ原因セリ故ニ此等ノ諸國又ハ討伐征畧ヲ主義トスル國ニ於テモ其在來ノ自國民ニ對スル關係ニ於テハ固ヨリ任意ノ強制ヲ許ササルカ故ニ國家思想ノ幼稚ナル當時ニ在リテハ手數料其他報償的名義ニ其形式ヲ變スルヲ常ト爲シタリ即チ絕對ナル無償ノ徵收方法ヲ執ルコト能ハスレタ多クハ國家カ直接ニ且ツ有形ナル行動ヲ爲シ其報酬トシテ人民ヨリ納稅セシムル迂遠ノ方法ヲ執リタリ今租稅ノ重ナル地租ヲ以テ我カ國古代ノ沿革ニ徵スレハ大化ノ新政以後所創班田ノ制ヲ設ケ國家ハ口分田トシテ庶人以上六歳ニ至レハ男子二段女子一

段百二十歩ノ土地ヲ供與シ之カ買賣讓與及ヒ相續等ヲ禁シ一段ニ二東二把ノ租税ヲ徵收シタリ故ニ當時ノ地租ナルモノハ其實一種ノ小作料ニ外ナラス然ルニ其後土地ニ對スル國家ノ所有權ハ漸次貴族僧侶大地主等ノ手ニ事實ニ於テ移轉スルニ至リ政府ノ財産ノ削減セラルルニ伴フテ其收入著シク減少シ一方ニ於ケル私權ノ發達ハ同時ニ一方ニ於ケル無償ノ徵收方法ノ必要ト相關聯シテ契約的課税時代ヲ生スルニ至レリ

所謂契約課税說ノ最モ盛ニ行ハレタルハ第十七八世紀即チ人權主義最モ盛ナル時代ニ在リ人民ハ經濟上ノ利益其他ノ欲望ヲ満足センカ爲メ國家ヲ構成スルモノナリトスル民約說ノ思想ハ租税ヲ以テ單ニ國家ノ勤勞ニ對シ支拂ハルル報酬ナリトノ觀念ヲ起サシメ人民ハ公權ニ依リテ安寧ヲ保護セラルルカ故ニ之カ對價トシテ租税ヲ支拂フヘキモノナリト思慮シタリ「モンタスキュー」カ租税トハ人民カ各自其財産ヲ安全ニ享有スルカ爲メ國家ニ供用スル財産ノ一部ナリト云ヒ佛國ノ國民議會ハ租税トハ國民總體ノ共同負債ニシテ社會カ役等ニ供與スル處ノ利益ノ對價ニ外ナラスト議決セルカ如キ皆此主義ニ基ケ

ルモノニシテ「ブルドホン」カ租税ハ國家カ勤勞ヲ供シ國民ハ之ニ換ヘテ貨幣ヲ支拂フ所ノ一種ノ交換ナリト云ヘルハ契約課税主義ノ理想ヲ表示セルモノナリ

此等極端ナル利益交換說ハ其後漸次進化シテ「ルワイヤー」氏ノ如キハ租税ハ社會生活ノ下ニ於テ人民カ過去現在及ヒ將來ニ於テ受クル利益又ハ前代カ後世ノ爲メニ消費シタルモノノ報償トシテ勞力又ハ貨物ヲ以テ支拂フ一國生産物ノ一部ナリト云ヘリ其後コッサ氏ノ如キハ利益交換說ニ國民義務說ヲ加味シ租税トハ富ノ一部分ニシテ國家其他ノ公共團體カ納稅者全體ノ利益ヲ圖ラシカ爲メ必要ナル費用ニ供スルカ爲メニ徵收スルモノナリト云ヘリ利益交換說ハ政治上成ハ專制的ノ賦課徵收ニ對スル牽制ト爲リ社會ノ福利安寧ヲ増進スルノ刺激ト爲ル利益アレトモ理論ノ根底タルヘキ民約論カ一片ノ空想ニ止マルノミナラス所謂交換セラルヘキ國家ノ功勞ハ決シテ之カ價格ヲ評量スヘカラサルモノナルコトハ財政ノ性質トシテ既ニ總論ニ於テ一言セル所ナリ一步ヲ譲リテ之カ利益ハ數理ノ上ニ於テ算定スルコトヲ得ヘシト爲スモ之ヲ各個人

民ノ享有スル程度ニ應シテ分配スルコトハ事實不能ニ屬スルモノナリ尙ホ一步ヲ譲リテ各箇人ノ享有スル利益ハ正確ニ之ヲ分配スルコトヲ得ヘシト爲スモ事實ニ於テハ國民カ納付スル租税ノ額ハ其享有スル利益ノ大小ニ比例スルモノニ非ス例ヘハ養育院ノ保護ヲ受クル貧民ハ利益ヲ受クルコト大ナルニ拘ラス毫モ納税ノ義務ヲ負擔セサルカ如シ

契約課税時代ニ在リテハ利益交換說ノ外尙ホ租税ヲ以テ一種ノ保險料ト解釋スル說行ハレタリ(ミラボー)ノ租税ハ社會ノ秩序ニ對シテ保護ヲ得ンカ爲メニ供スル所ノ前金ナリト云ヘルカ如キ即チ公安ニ對スル保險料說ナリ此說ハ又政府ノ功勞ヲ以テ總テ公安ノ維持ニ限定スルノ嫌アルノミナラス國民カ公安ノ維持ニ依リテ保護ノ利益ヲ受クル生命財產ノ價格ノ算定シ難ク又其納税ノ負擔カ其生命財產ノ價格ニ比例セサルコト利益交換說ノ場合ニ異ナラス殊ニ公安其モノカ破レタルトキハ管ニ之カ保險ヲ爲ササルノミナラス却テ租税其他ノ負擔ヲ増加スヘキモノニシテ理論上何等ノ根據ヲモ有セサルモノナリ近時國家ノ觀念發達シ所謂國民經濟的課税時代ニ遷ルヤ租税ナルモノハ國家

其モノカ生存上必要ナル經費ヲ支辨スルカ爲メ徵收スルモノタルコト一般ノ公認スル所ト爲レリ但シ國民義務說ニモ國家ノ本質ニ付テ論スルコトナク單ニ國民ノ國家ニ對スル義務トシテ説明スル者アリ(ローシエ)氏ノ租税トハ各箇人經濟者カ國家其他ノ公共團體ニ從屬セル結果トシテ其財政上ノ必需ヲ充サンカ爲メニ支拂ハサルヘカラサル收納物ナリト云ヘルカ如キ是ナリ國家ノ本質ニ論及スル者ハ租税其モノニ對シ又之カ支出ノ目的ヲ加フル者アリ(メニエー)カ租税トハ行政費及ヒ國家ノ資本ヲ改進スル一般ノ費用ナリト云ヘルカ如キ是ナリ又或ハ財政上ノ收入以外ニ別ニ徵收ノ目的ヲ加味スル者アリ近時(グネル)等社會政策主義ヲ保持スル學派カ租税ノ徵收ハ財政上收入ヲ得ルノ外同時ニ社會ニ於ケル富ノ調和ヲ目的トスル強制的分配ナリト云ヘルハ既ニ上述セル所ナリ蓋シ租税ノ定義トシテ之カ支出又ハ收入ノ目的ヲ加味スルハ恰モ法律ノ定義ニ其法律ノ性質又ハ立法ノ目的ヲ加フルニ同シ租税ナルモノハ必スシモ此等ノ理想ノ遂行ヲ條件トシテ始メテ成立スルモノニアラサルハ固ヨリ言フ埃タサル所ナルヲ以テ予ハ租税ニ定義シテ次ノ如ク謂ハントス

租稅トハ國家又ハ公共團體カ其經費ニ充ツルカ爲メ私人ヨリ徵收スル經濟的貨財ノ一般收納ナリ

第一租稅ハ國家又ハ公共團體カ其經費ニ充ツルヲ目的ト爲スモノナリ國家又ハ公共團體ハ自己ノ生存發達ヲ爲スカ爲メ巨額ノ經費ヲ要ス然レトモ其私有財產又ハ營業ニ由ル收入ヲ以テ之カ支辨ヲ充スコト能ハス其大部ヲ租稅收入ニ仰クニ至リシハ近時國家ノ發達ニ伴フ自然ノ數ナリトス

第二租稅ハ私人ヨリ徵收スルモノナリ茲ニ私人ト云フハ權力團體ニ對シ服從ノ地位ニ在ル者ヲ謂ヒ自然人タルト法人タルト內國人タルト外國人タルトハ毫モ同ハサル所ナリ内外國人ノ別ヲ立テサルコトハ所謂國民義務說ニ對シ矛盾スル所アルカ如キモ租稅徵收ノ根據ト租稅徵收ノ範圍トハ自ラ問題ヲ異ニスルモノナリ國民ハ國家ヲ組織スルニ因リ國家ノ生存發達ニ必要ナル租稅ヲ納ムルノ義務アリ然レトモ租稅ヲ納ムル者ハ必スシモ國民タルコトヲ要素ト爲スモノニアラス國民ニアラスシテ其國ノ保護利益ヲ享受スル者ハ其保護利益ニ對スル報酬トシテ一定ノ納付ヲ命スルコトハ一方ニ於テハ自國民カ外國ニ

居住シテ其所在國ヨリ利益保護ヲ受タル場合ニ於テ其負擔ノ一部ヲ納付スルト同シタ毫モ條理ニ反スルモノニアラス是レ課稅ノ根據ト課稅ノ範圍ト混同スヘカラサル所以ニシテ一方ニハ條理ノ觀念ハ常ニ實際ニ於テ社會上最モ勢力ノ大ナルコトヲ證明スルモノナリ其詳細ニ至リテハ後節租稅ノ原則公正ノ原則及ヒ租稅制度國稅及ヒ地方稅論ノ下ニ於テ説明スル所アルヘシ又徵收トハ公權ノ作用ニ依リ權力團體カ服從者ニ強制スル無償ノ納付ニシテ其種類分最徵收ノ方法及ヒ時期等ハ總テ權力者ノ定ムル所ニシテ毫モ服從者ノ選擇協定ヲ許スモノニアラサルコトヲ謂フ

第三租稅ハ經濟的貨財ノ一般收納ナリ茲ニ一般收納ト稱スルハ手数料官業官有財產ノ收入ノ如ク相互提供ノ原則ニ依リ各國特別ニ收納セラルルコトナク國家又ハ公共團體カ一般ニ絕對ノ收納ヲ爲スヘキコトヲ謂フ租稅ハ經濟的ノ貨財ナリ故ニ非經濟的貨財即チ自由貨財ハ租稅ト爲ルコトヲ得ス然レトモ經濟的貨財ハ有形ト無形トヲ論セス均シク租稅ト爲ルコトヲ得ヘキカ若シ無形ノ貨財モ均シク租稅ト爲ルコトヲ得ヘシトスルモ金錢ヲ以テ之カ價格ヲ評量

スルコトヲ得ヘキ夫役ノ如キモ金錢ヲ以テ之カ價格ヲ評量スルコトヲ得サル
 兵役ノ如キモ均シク租税ト視ルヘキヤ是レ學說ノ岐カルル所ナリ
 夫役ノ如キハ地方團體カ負擔者ノ利益ヲ圖リ之カ負擔ヲ輕減セシカ爲メ金錢
 ノ代納ヲ許スル原則ト爲スモノナルヲ以テ府縣制第一一二條郡制第九二條市
 制第一〇一條町村制第一〇一條參照此等ノ場合ニ於テハ之ヲ租税ト看做スモ
 不可ナルコトナシ然ルニ兵役ノ如キ忠實服從ノ義務ヲ有スル勤勞ハ金錢ヲ以
 テ評量シ得ヘキモノニアラサルカ故ニ「パスターブル」氏ノ如キハ兵役ノ如キハ
 性質上租税ノ一種ト視ルヘキモ形式上ニ於テハ租税ト視ルヘカラスト云ヘリ
 固ヨリ理論上兵役ノ如キモ租税ノ一種ト視ルヘキモノニシテ殊ニ各國ノ沿革
 ニ徴スルモ古代ニ於テハ勤勞ハ租税ノ重要ナル部分ヲ占メタリ我國大寶令ノ
 規定ニ依ルモ租庸調ノ三者ニ於テ庸ハ勤勞ノ一般徵收ヲ指示セルモノニシ
 テ現品ノ代納ヲ許シタルモノナリ但シ今日ノ財務行政ノ實際ニ於テハ兵役ノ
 如キハ固ヨリ租税ト認ムルコトナシ隨テ行政法等ニ於テハ租税ト兵役ハ其
 公權ノ作用タルニ於テハ一ナルモ其服從ノ主體カ兵役ニ於テハ内國人ニ限ラ

レ租税ハ内外國人ニ通スル點ニ於テ其客體カ租税ハ貨物ニ限ラレ兵役ハ勞務
 ニ限ラレル點ニ於テ其供用ノ方法カ兵役ハ直接ニ供用セラレ租税ハ間接ニ供
 用セラレル點ニ於テ相異ナルモノトシ兵役ハ軍事行政ノ下ニ於テ明カニ相區
 別セラレルヲ例ト爲セリ

租税ノ觀念ヲ講述スルノ序次便宜ノ爲メ租税ニ關スル用語ノ重ナルモノニ付
 キ其意義ヲ畧述スヘシ

第一 租税ノ主體 租税ノ主體即チ被稅者ニハ納稅者ト負稅者トノ別アリ納
 稅者トハ其姓名納稅額等カ租稅原簿ニ記入セラレ直接ニ租税ヲ納付スル者ニ
 シテ負稅者トハ其租税ヲ負擔シテ自己ノ所得又ハ財産中ヨリ支出スル者ヲ謂
 フ故ニ納稅者ト負稅者トハ同一人ナルコトアリ又ハ相異ナルコトアリ通常直
 接稅ナルモノハ納稅者ト負稅者ノ同一人ナルコトヲ豫期セル租税ニシテ間接
 稅ナルモノハ納稅者ト負稅者ノ相異ナルヘキコトヲ豫期セルモノナリ

第二 租税ノ客體 租税ノ客體トハ租税賦課ノ標準ト爲ル人物又ハ事實ヲ謂
 フ即チ其人物又ハ事實ノ存在或ハ發生消滅ニ依リテ租税ノ支拂ヲ爲スヘキモ

ノナリ通常汎ク總稱シテ課税物件ト謂フ人カ課税物件ト爲ルハ分頭税ヲ課スル場合ナリ即チ此場合ハ租税ノ主體ト客體カ同一ニ歸セル場合ナリ古代歐洲各國ニ於テハ人民ノ階級ニ應シ各相異ナレル税率ノ分頭税ヲ課シ今日ニ於テモ猶ホ普魯西國ノ等級税ノ如キ又我沖繩ニ於ケル人頭税ノ如キ多少ノ實例ナキニアラス物ヲ課税物件ト爲ス場合ノ主要ナル物ヲ土地家屋等ノ不動產ト爲シ動勞又ハ財産ニ因ル所得モ亦課税物件ト爲スヲ例ト爲セリ事實ヲ課税物件ト爲ス重ナル事實ハ營業契約財産ノ賣買贈與等ト爲ス

第三 税源 税源トハ租税ノ流出スル源泉ナリ税源ノ課税物件ニ對スル關係ハ猶ホ負税者ノ納税者ニ對スル關係ノ如ク課税物件ハ税源ヨリ租税ヲ吸收スル標準ト爲リ方便ト爲ルモノナルヲ以テ税源ト課税物件ハ相合致スルコトアリ又然ラサルコトアリ例ヘハ所得税ノ如キハ其所得税トシテ納ムル金額ハ其所得ノ一部ヨリ支出シ而モ其賦課ノ標準ハ所得ノ多寡ニ存スルヲ以テ税源ト課税物件ハ相合致スルモノナリ之ニ反シテ地租ノ如キハ其賦課ノ標準ハ土地ノ廣狹地代又ハ地價等ニ依リ其税源ハ其土地ノ收益ニ在ルヲ以テ税源ト課税

物件ハ相合致セサルモノトス税源ノ範圍限界ハ最も重要ナル問題ニシテ租税カ私人ノ財産ニ及ホストキハ税源其モノヲ潤渴スルノ弊アルヲ以テ租税ハ所得ニ對シテノミ課税スヘシト爲ス說ハ租税ニ對スル經濟上ノ原則トシテ認メラルルモノナリ

第四 租税ノ單位税率及ヒ税尺 租税ノ單位トハ課税物件ノ一定ノ分量ニシテ租税ノ賦課算定ノ基礎ト爲ルモノナリ税率トハ其一定ノ分量ニ對シテ賦課スル税額ヲ謂ヒ其税額ノ單位ニ對スル比率ヲ税尺ト謂フ又別ニ税率ト税尺トヲ包含セテ税歩ト稱スルコトアリ此等ノ用語ハ實際ニ於テハ固ヨリ一定スル所ナリ現行ノ租税法規ノ如キハ茲ニ所謂税尺及ヒ税率ヲ其ニ税率ナル用語ニ依リテ表示セラル

第五 租税臺帳及ヒ税表 租税臺帳トハ租税ノ主體客體及ヒ租税ノ負擔者クハ義務ヲ證明スル事實等ヲ集録セル官衙ノ記録ナリ租税臺帳中最モ重要ナルハ地租ノ臺帳ニシテ歐洲諸國ニ在リテハ特ニ之ニ關スル法規ヲ制定セル所尠カラス明治二十二年三月勅令第三十九號土地臺帳規則參照税表トハ或種ノ租

税ノ各物件ニ付テ單位及ヒ稅步等ヲ記錄セル官衙ノ表ナリ輸出入税ノ如キ移轉税ニ在リテハ一輸出入物品ノ品質數量ニ應ジ稅表ニ據リテ租税ノ賦課ヲ爲スモノナルカ故ニ此種ノ租税ニ對シテハ稅表ハ租稅臺帳ノ效用ヲ爲スモノナリ

第二章 租税ノ原則

緒論

租税ノ原則トハ租税ノ廢置分合及ヒ賦課徵收ニ對シ之カ標準ト爲リ之カ準繩ト爲ルヘキ法則ニシテ近時租稅制度ノ複雜ヲ増スニ從ヒ租税ノ原則ハ租稅問題ニ於テ倍々重要ナル地位ヲ占ムルニ至レリ租税ノ原則ニ付テ最モ有名ナルモノハ「アダムスミス」ノ原則トス其原則トハ即チ

第一 國民ハ其財力ニ應ジテ政務ノ費用ヲ分擔スヘシ國民ハ國家ノ保護ノ下ニ在リテ享有スル所ノ利益ニ比例シテ政府ノ費用ヲ分擔セサルヘカラス
第二 總テ租税ノ種類、數額、納税ノ時期及ヒ場所等ハ不法ナル賦課徵收ヲ爲サ

シメサルカ爲メ公正ニシテ且ツ確實ナルコトヲ要ス
第三 租税ノ徵收方法ハ總テ納税者ノ便益ニ反セサルコトヲ要ス

第四 租稅徵收ノ費用及ヒ期間ハ成ルヘク少ク且ツ速ナルコトヲ要ス

ノ四原則ナリ其第一ノ原則ニ於ケル財力ニ應スル半等說ハ毫モ其趣旨ニ於テ不可ナルコトヲ見サルモ利益交換說ヲ採リ利益ト財力ト相正比例スルモノト誤解セルカ如シ然レトモ氏ノ四大原則ハ大體ニ於テ固ヨリ非難スヘキ點ナキノミナラス爾來大ニ學者ノ注意ヲ喚起シ第十九世紀前半ニ於ケル各國ノ租稅政策上ニ及ヒセシ影響亦甚シト爲サス氏カ租税ノ原則ニ付キ研究ヲ試ミシヨリ多數ノ財政學者殊ニ「ウォールカー」「シスモンデー」「ガルニエー」「フオウケ」「ワグネル」「ザックス」等幾多ノ學者ニ由リテ改正増補セラレ「シスモンデー」ノ如キハ主トシテ經濟上ニ於ケル租税ノ原則ヲ主張セ次ノ四箇ノ原則ヲ唱ヘタリ

第一 租税ノ負擔ハ資本ニ在ラスシテ收入ニ在ルコトヲ要ス

第二 租税ヲ賦課スルニ當リテハ總生産物ト收入トヲ混合セサルコトヲ要ス

第三 租税ハ決シテ納税者ノ生存必要費ヲ侵スヘカラス

第四 租税ハ之ヲ賦課セル富ヲシテ他國ニ流出セシメサルコトヲ要ス
「ガルニエ」氏ノ如キハ租税ノ原則ヲ細分詳説スルコトニ依リテ大ニ租税ノ觀念ヲ明瞭ナラシムヘシト爲シ租税ノ全體ニ關スルモノ十二則ニ加フルニ間税ニ關スル四則合計十六ノ原則ヲ設ケタリ而シテ租税ノ全體ニ關スル原則ハ即チ左ノ如シ

第一 租税ハ公平ノ原則ニ基カサルヘカラス納税者ハ法律上皆同等ナルヲ以テ凡テ租税ヲ納メ得ル者ハ悉ク納税ヲ免ルヘカラス
第二 租税ノ税額ハ人民所得ノ一小部分ニ止メ輕少ナルコトヲ要ス
第三 租税ノ税額及ヒ徵收ノ時期方法等ハ明瞭ニ確定シテ違法紛議ノ生セサルコトヲ期スヘシ
第四 租税ノ賦課徵收ハ簡易正確ニシテ徵收費ヲ少クシ速ニ國庫ニ入ルコトヲ要ス

第五 租税通脱ノ弊害ヲ防遏スルコトヲ要ス

第六 租税ハ人民ノ財産所得ニ比例シテ賦課スルコトヲ要ス但シ税額重カ

ラサルトキハ一定ノ限度マテハ累進ノ比率ヲ以テ賦課スヘシ

第七 租税ハ間税ヨリモ直税ヲ用フルコトヲ要ス

第八 租税ヲシテ單一ニ歸セシムルコトヲ務メ成ルヘク簡約ナラシムヘシ

第九 納税者ニ租税ヲ許諾セ且ツ之ヲ検査セシムル權利ヲ保障スヘシ

第十 人民ハ政府ニノミ納税シ且ツ眞ニ施行セラレタル國務ニ對シテノミ納税スヘシ

第十一 租税ハ其性質上又ハ結果ニ因リテ道德上ノ弊害ヲ生スルコトナカラシムルコトヲ要ス

第十二 政府ハ租税收入ヲ悉ク支辨シ盡ササル以上ハ新税ヲ設ケ又ハ公債ヲ起スヘカラス

次ニ間税ニ關スル四原則トハ即チ

第一 間税ハ奢侈品ニ賦課スルコトヲ要シ比較的重税ト爲スコトヲ妨ケス
第二 間税ハ成ルヘク食用品ニ課スルコトナキヲ要ス但シ健康ヲ害スル如キ物品ハ此限ニ在ラス

第三 間税ヲ一般ノ消費物及ヒ人生必須ノ物品ニ課スルトキハ其額最モ輕カラサルヘカラス又賦課スヘキ税目ハ密買等ノ弊害賦課徴收ノ煩雜等ヲ避タル爲メ成ルヘク少キコトヲ要ス

第四 關稅ハ輸入品及ヒ該國ニ產出セサル物品若クハ其製造ヲ禁止スルモ散テ大ナル不便ヲ生セサル物品ノミニ之ヲ賦課スルコトヲ要ス是レ內國ノ生産ニ就テ政府ノ收稅上ノ干渉ヲ避クルカ爲メナリトス
此他多數ノ學者ハ租税ノ原則ニ對シ各種ノ研究ヲ試ミタルモ皆或ハ一部ニ偏シ或ハ分類ノ方法ヲ失シ漸ク「ワグネル」ニ至リテ最モ完備ナル理論的秩序的ノ分類ノ法ヲ見ルニ至レリ氏ハ租税ノ原則ヲ財政上ノ原則經濟上ノ原則道義上ノ原則及ヒ行政上ノ原則ノ四部ニ大別シタリ
財政上ノ原則ハ又細分シテ

- (一) 經費ヲ支辨スルニ充分ナル收入ヲ得ヘキコト
 - (二) 經費ノ増減ニ伴ヒテ屈伸力ヲ有スルコト
- ノ二者ニ分類シ經濟上ノ原則ハ又細分シテ

- (一) 税源ノ種類ニ對シテ選擇ヲ爲スヘキコト
 - (二) 負擔ノ輕重ヲ計リテ税源ノ潤滑ヲ防クコト
- ノ二ト爲シ道義上ノ原則ハ又細分シテ
- (一) 租税ノ負擔ハ國民一般ニ普及スヘキコト
 - (二) 租税ノ負擔ハ國民ノ納稅力ニ比例スヘキコト
- ノ二ト爲シ行政上ノ原則ハ又細分シテ

- (一) 租税ノ賦課徴收ハ正確ナルヘキコト
 - (二) 租税ノ賦課徴收ハ納稅者ノ便宜ニ副フヘキコト
 - (三) 租税ノ賦課徴收ハ成ルヘク徴收ノ費用ヲ節減スヘキコト
- ノ三ト爲セリ氏ノ分類法ハ現時一般ニ模範ト爲ス所ニシテ茲ニハ大體ニ於テ氏ノ分類方法ニ依リ租税ノ原則ヲ講述セントス但シ便宜ノ爲メ財政ノ意義ヲ廣義ニ解シ財務行政ノ原則ヲ均シク財政上ノ原則中ニ包含セシメ結局次ノ三原則ト爲ス
第一 財政上ノ原則 財政上ノ原則トハ租税ニ依リテ國庫ニ必要ニシテ且ツ充分ノ收入ヲ與ヘ尙ホ租税行政ノ完備スルコトヲ謂フ

第二 公正ノ原則 公正ノ原則トハ租税ハ一般平等ニシタ且ツ正確ナルヘキコトヲ謂フ

第三 經濟上ノ原則 經濟上ノ原則トハ租税ノ賦課徴收ニ因リテ經濟上ノ損害擾亂ヲ來サシメサルコトヲ謂フ

以上ノ原則ニ於テ第一原則ハ租税其モノノ根本的性質ニ基クモノニシテ第二及ヒ第三ノ原則ハ簡人經濟及ヒ一般經濟ニ及ホス影響並ニ關係ニ對スル第一ノ原則ヲ達セシムヘキ調和手段トシテ認ムヘキ原則ナリ故ニ茲ニハ一般ノ例ニ反シ第一ニ財政上ノ原則ヲ述ヘ以下行政上及ヒ經濟上ノ原則ニ論及スル所アラントス

第一節 財政上ノ原則

第一款 租税收入ノ數額及ヒ性質ニ關スル原則

(甲) 租税收入ノ數額ニ關スル原則 租税收入ノ數額ハ經費ヲ支辨スルニ足ルヘキ充分ノ收入アルコトヲ要ス蓋シ租税ハ現時各國ニ於テ國庫收入ノ大部分ヲ

占ムルモノナリ隨テ租税ハ國庫ノ收入上重要ナル關係ヲ有シ各種ノ租税ヲ配合シテ充分ノ收入ヲ期シ各國俱ニ復税制度ヲ採ルニ至レリ單一租税制度ハ實ニ於テ之ヲ實行スルコト能ハサル所以ノモノハ租税公平ノ原則ニ背反スルニ由レトモ亦單一ナル租税ヲ以テ國庫ノ租税收入ヲ充ツヘキ經費ヲ支辨スル能ハサルコト其重ナル原因ナリ奢侈税ノ如キモ風教上ノ觀念ヨリ一般ニ良好ナル租税トシ稱揚セラルルモノナレトモ收入ノ數額ヨリ觀ルトキハ良税ト謂フコト能ハス如何トナレハ奢侈品ハ生活上必要ナル貨財ニアラサルカ故ニ一方ニ於テハ其需要ノ總額カ絕對的ニ少キヲ以テ巨額ノ收入ヲ得ルニ足ラサルノミナラス一方ニ於テハ税率ヲ高ムルトキハ直チニ隱匿廢止其他ノ手段ニ依リ其需要ヲ減シ倍其總收入額ヲ減少スルモノナレハナリ

(乙) 租税ノ性質ニ關スル原則 租税ハ屈伸ノ性質ヲ有スルコトヲ要ス蓋シ國家ノ經費ハ年ヲ逐フテ増加ノ傾向ヲ有スルヲ以テ租税收入モ亦歲出ノ増加ニ相隨伴スルノ性質ヲ有セサルヘカラス所謂租税ハ時ノ必要ニ應シ容易ニ他働又ハ自働ニ由リテ其收入額ヲ増減シ得ヘキ力ヲ有スヘシト爲ス理由ハ一ニ此點

ニ存ス今重ナル租税ニ付キ屈伸力ニ對スル大體ノ觀察ヲ下セハ次ノ如シ

(一) 收入税 收入税ハ文化發達セル國家ノ下ニ在リテハ財政上ノ原則ニ適合セサルヲ常トス如何トナレハ此種ノ租税ハ社會ノ進歩ニ伴ヒ容易ニ増加シ得ヘキモノニアラサルノミナラス性質上不動ヲ尙フモノニシテ縱令財政上餘裕アル場合ト雖モ輕シク之ヲ輕減スヘキモノニアラス例ヘハ地租ノ類ニ於テハ自働的ノ屈伸力ヲ有セサルノミナラス之カ税率ヲ輕減スルトキハ納税者ハ地價ノ騰貴ト相待チテ二重ノ利益ヲ與フルノミナラス再ヒ之ヲ復舊セントスルトキハ自働的ノ屈伸力ヲ有スル消費税・移轉税等ニ比シテ一層ノ困難ヲ感スヘキコトハ論ヲ俟タサル所ナリ

(二) 所得税 所得税ハ其屈伸力ヲ有スル點ニ於テハ又他ノ諸税ノ及フ所ニアラス(ス・タイン)ノ如キハ所得税ヲ以テ他ノ諸税ニ對スル補充税ト看做セリ是レ自働的ノ屈伸力ヲ有スルノミナラス税率高低ノ範圍最モ廣キモノナレハナリ英國ノ如キハ所得税ヲ以テ財政ノ緩急ニ應スル調和ノ手段ト爲シ年殆ト税率ノ變更ヲ見サルコトナク税率ノ歩合ハ八厘三毛ヨリ六分七厘ノ間ヲ昇降シタ

リ但シ所得税ハ戰時其他ノ事變ニ際シ國家收入ノ増加ヲ要スル場合ニ於テ自働的ニ其收入ヲ減スルコトアルノミナラス其所得税ノ總額ハ他ノ諸税ニ比シテ比較的少額ナルモノナリ我國ノ三十三年度ノ豫算ニ徴スルモ所得税ノ收入額ハ地租及ヒ酒税ニ比シテ其十分ノ一以下ニ在リ

(三) 移轉税 移轉税ハ經濟社會ノ發達ニ伴ヒテ著シク増加スヘキモノナルヲ以テ又屈伸力ヲ有スル良税ナレトモ移轉ノ度數ニ應スル間税ナルカ故ニ戰時其他ノ事變ニ由リ經濟界ニ異動ヲ生スル場合ニ於テ一方ニハ急激ノ増加ヲ要スルニ拘ラス却テ著シク減少ヲ來ス缺點ヲ生スルハ所得税ノ場合ニ比シテ著シク大ナリトス

(四) 消費税 消費税ハ租税收入ニ對シ充分ノ供給ヲ爲スノミナラス人口ノ増加ト文化ノ發達ニ伴ヒ富ノ生産消費ノ大ナルニ從ヒ其收入ノ増加ヲ見ルモノナリ然レトモ移轉税ト同一ノ缺點ヲ有シ税率ノ増加ハ常ニ收入ノ減少ヲ來スヘキコト言ヲ俟タサルナリ

第二款 租税行政ニ關スル原則

(甲) 租税ノ賦課ニ關スル原則 租税行政ニ於テ第一ニ爲スヘキハ租税ノ賦課ナリ租税ノ賦課ハ古代社會經濟ノ幼稚ナル時代ニ在リテハ課税物件租税ノ單位等單純ナルノミナラス租税ノ種類又夥カリシヲ以テ租税ノ立法及ヒ之カ賦課ニ關スル行政ハ比較的簡單ナリシモ社會經濟ノ進歩ニ伴ヒ租税ノ種類倍々多ク各種ノ課税物件ニ對シ公正ノ原則ニ從ヒテ一般ニ且ツ平等ニ各人ノ納税力ニ應ジテ賦課スルコトヲ要スルニ至リテヨリ各種ノ課税物件ヲ審査シ各人ノ納税力ヲ判定スルコト頗ル困難ヲ極ムルニ至レリ隨テ現時何レノ國ニ通スルモ課税物件ノ審査ヲ爲スカ爲メニ幾多ノ方便ヲ施ササルモノナシ其方法及ヒ機關ハ當局ノ稅務官吏ノ外或ハ納税者自身ノ申告ヲ爲サシメ或ハ地方團體ノ官吏公吏ヲシテ之カ補助ニ當ラシメ或ハ特別ノ合議制ヲ設ケ或ハ一般ノ私人ヲシテ報告ヲ爲サシムル等其數枚舉ニ遑アラズ

納税者自身ノ申告ハ納税者ヲシテ自己ノ所得財產又ハ收入ノ額其他納税額ヲ

決定スルニ必要ナル事實ヲ官廳ニ届出テシムルヲ謂フ明治三十二年二月法律第十四號所得稅法第七條第八條參照但シ納税者ヲシテ真正ノ申告ヲ爲サシムルカ爲メ或ハ申告者ヲシテ誓詞ヲ爲サシムルコトアリ或ハ公衆ニ其申告ヲ表示スルコトアリ又我國ノ如キ特ニ之カ秘密ヲ保障スルコトアリ(所得稅法第四條其三何レノ方法ヲ採ルニ拘ラス一般ノ德義心未タ充分ニ發達セサルヲ以テ虛偽ノ申告ニ對シテハ法律上ノ取締ヲ要スルコト言フ埃及ナル地方團體ノ吏員ヲシテ租税ノ賦課ニ關シテ補助ヲ爲サシメ(所得稅法第一六條第一七條第二〇條)又ハ特別ノ調査委員ヲ設クルハ各國ニ於テ其例ヲ見ル所ナリ我所得稅法ニ於テハ第九條乃至第三十四條ニ於テ調査委員ニ關スル規定ヲ設ケ尙ホ第三十六條ニ於テ審査委員會ナルモノヲ設定セリ

此ノ如ク國家カ各種ノ方法機關ヲ設ケテ精密ニ課税物件ヲ調査シ納税力ヲ判定スルハ固ヨリ國家當然ノ職務ナリト雖モ其間過失又ハ違法ノ行爲ナキヲ保ヒス故ニ一方ニ於テハ納税義務ヲ遁脱センカ爲メ不正ノ行爲ヲ行フ納税者ニ對シ法律上ノ制裁ヲ加フルト共ニ一方ニ於テハ訴訟訴訟其他ノ方便ニ依リテ

納税者ニ對シ之カ救済ノ方法ヲ與ヘスルハアラス所得稅法第三六條第三九條第四〇條

(乙)租税ノ徵收ニ關スル原則 租稅行政ニ於テ第二ニ爲スヘキハ租税ノ徵收ナリ租税ノ徵收ハ國庫並ニ納税者ニ對シテ不利不便ナキコトヲ要ス即チ徵收方法ヲ正確ニシテ收税上ノ誤謬怠慢等ノ豫防及ヒ救済等ヲ圖リ徵收方法ヲ簡易ニシテ徵收費ノ減少ヲ期セ併セテ納税ニ伴フ不便ヲ減殺スルコトヲ要ス故ニ徵收ノ時期場所其他ノ手續ハ當ニ經費ノ上ニ於テ密接ノ關係ヲ有スルノミナラス直接又ハ間接ニ納税者ニ及ホス有形無形ノ利害關係亦甚タ大ナルヲ以テ最モ之カ施行ヲ慎重スルハアルヘカラス租税ノ徵收ニ於テ上述スル所ノ趣旨ヲ達スルカ爲メ徵收機關ニ關スル問題ハ又租稅行政ニ於テ重要ナルモノニ屬セリ租稅徵收ノ方法ハ國家直接ノ機關ニ依リテ徵收スル直接徵收法ト國家間接ノ機關又ハ私人ニ依リテ徵收スル間接徵收法ト二種ニ別スコトヲ得ヘシ

第一 間接徵收法 間接徵收法ハ請負徵收法及ヒ委任徵收法ト二箇ニ細別ス

(一)請負徵收法ハ古代屢行ハレタル方法ニシテ今日ニ於テハ支那朝鮮ノ如キ財

政ノ幼稚ナル國ヲ除キテハ一般ニ採用スル所ナシ此方法ハ國家カ徵收費ヲ要セステ一定ノ時期ニ一定ノ收入ヲ確得スルノ利便アリ而シテ請負人ハ官吏カ收税ノ事務ヲ行フ場合ト異ナリテ直接ニ利害關係ヲ有スルニ由リ徵收ノ費用ニ於テ節約スルコト著シキカ故ニ請負料金ニシテ不當ナラサル以上ハ結局國庫ニ收納スル純收入ノ額ハ直接徵收法ノ場合ニ比シテ却テ大ナルコトアルヘシ然レトモ租税ナルモノハ國民カ國民タルノ義務ニ由リテ國家ニ納付スル無償ノ給付ナルカ故ニ一私人カ國家ト納税者トノ間ニ介入シテ租税ノ徵收ヲ營業ト爲スコトハ租税其モノノ性質ニ反スルモノナリ隨テ各國ノ史乘ニ徵スルモ請負人カ自己ノ一時ノ收入ヲ得ルニ專ラニシテ收斂ニ努メ不平等ナル徵收ニ依リテ人民ヲ苦メ人民ト請負者ノ間ニ於ケル仇敵ノ念ハ牽ヒテ國家ノ治安ヲ害セシ例ニシテ足ラス隨テ此方法ハ現今財政發達セル國ニ在リテハ又採用セラルルコトアルナシ

(二)委任徵收法ハ又配付徵收法ト謂ヒ國家カ下級ノ政治團體ヲシテ租税ヲ納メシメ其政治團體カ又如何ニシテ其收入ヲ得ヘキヤハ總テ團體ノ權限ニ委任ス

ルモノナリ此方法ハ財務行政未タ發達セス國家ノ權力薄弱ナリシ時代ニ在リ
テハ租税徴收上便宜ノ方法ニシテ古代封建時代ニ於テハ君主ト諸侯諸侯ト自
由都市トノ間ニ於テ屢行ハレタル方法ナレトモ今日ニ於テハ殆ト其跡ヲ絶テ
唯支那朝鮮ノ如キ財政ノ幼稚ナル國及ヒ政治上ノ沿革ニ基ケル聯邦國等ニ於
テ二三ノ例ヲ見ルニ過キス
第二節 直接徴收法 直接徴收法トハ國家カ其任命スル官吏等ニ依リテ直接ニ
徴收スル方法ナリ但シ下級ノ政治團體ヲシテ租税徴收ノ執行ヲ委任スルコト
アリ其孰レノ場合ニ通スルモ徴收ノ實ヲ舉クルカ爲メニ特種ノ法規ニ依ルハ
各國ノ共ニ認ムル所ニシテ我國ニ於テハ明治三十年三月法律第二十一號國稅
徴收法第三章滯納處分法ニ依リ間接以外ノ國稅滯納者ニ係ル者ニ對シ所有財
産ノ差押賣却ノ特權ヲ保有シ以テ收入ノ正確ヲ期セリ

第二節 公正ノ原則

公正ナル字義ノ觀念ハ常ニ時ト所ニ依リテ其軌ヲ一ニセス是レ道德ノ觀念善

惡ノ標準其モノカ相對的ニ變化スルニ由リテ觀ルモ明カナル所ニシテ希臘羅
馬ノ時代ニ在リテハ奴隸及ヒ從屬國ノ人民カ課税セラレタ市民カ免税ノ特權
ヲ有シ封建制度ノ時代ニ在リテハ貴族僧侶豪族等カ租税ヲ負擔セスシテ農商
工業者カ重キ負擔ヲ受クシコトカ各其當時ニ於ケル公正ノ觀念ヲ代表セルモ
ノナリ隨テ茲ニ公正ノ原則ト稱スルハ現時ニ於ケル公正ノ原則ニシテ國民ハ
國家又ハ公共團體ニ對シ納税ノ義務ヲ有シ無償ノ納付ヲ爲スヘキト共ニ其納
付カ偏重スルコトナク國民ノ間ニ分配セラレ且ツ各自ノ納税力ニ比例シテ租
税ノ負擔ヲ爲スヘキコトヲ謂フモノナリ

第一款 一般ノ原則

租税ノ負擔カ一般ナルヘシトノ原則ハ第一期ニ於テハ専ラ主觀的ニ租税ノ主
體ニ付テ行ハレ第二期ニ於テハ専ラ客觀的ニ税源ニ付テ行ハレタリ第一期ハ
佛國革命以來貴族僧侶其他ノ階級又ハ特定人ニ對スル免税其他ノ特權ハ漸次
之ヲ廢止シテ一般ニ租税負擔ノ義務ヲ總テノ階級及ヒ人ニ對シテ擴張セラレ

租税主體ノ普及ノ目的ヲ達セラルルト共ニ第二期トシテ總テ課税ヲ得ヘキ財源ニ付テハ其種類其他ノ事情如何ニ拘ラス總テ租税ヲ賦課スルコトト爲リ租税ノ賦課ハ主體ノ普及ヨリ一變シテ租税客體ニ對スル普及ヲ原則ト爲ス至レリ是ニ於テカ一方ニ於テハ或一部ノ人民ニ對シテ課税ヲ廢止シ輕減シ又一方ハ於テハ或特種ノ事實ニ對シテ課税ノ免除輕減ヲ爲スニ至レリ例ヘハ限定ノ生計費ニ對スル所得税ノ免除天災其他ノ事變ニ因ル損害ノ事實ニ基キ地租ノ免稅減稅ノ處分ノ如キ是ナリ

方今各國ノ所得稅法ニ於テハ限定生計費ノ免稅ヲ認メサルモノ尠シ此事タル固ヨリ社會政策ノ趣旨ニ一致スルモ社會政策ノ結果トシテ生シタルモノニアラス一ニ稅源ノ普及ニ對シ限定生計費以下ノ所得ハ稅源ト認ムヘカラサルニ基因ス殊ニ所得カ限定生計費ヲ下ル下級ノ人民モ固ヨリ直接税ニ付テハ一般ニ之カ負擔ヲ爲スコト尠カルヘキモ間接税ニ在リテハ其所得ニ比例シテ受クル所ノ負擔ハ決シテ輕シト爲ササルモノナリ是レ生計ノ費用ハ所得ノ高ニ比例スルコトナク極メテ屈伸力少キモノナレハナリ

地租ニ於テ其土地カ天災事變ニ因リ荒地ト爲リシカ爲メ一定ノ期間ニ於テ課税ヲ免除シ稅額ヲ輕減シ或ハ納稅ノ時期ヲ延期スルハ又各國ノ地租條例ニ於テ認ムル所ニシテ均シク稅源ト認ムヘカラサルコト言フ埃タス(明治十七年地租條例第二十條乃至第二十四條明治三十年震災地方地租特別處分法明治三十二年水害地方地租特別處分法參照)

上述スルカ如ク租税ノ一般ノ原則ハ現時ニ於テハ人及ヒ稅源ニ付テ殆ト網羅シ盡スト共ニ場合ニ依リテハ同一ノ稅源ニ對シテ重複ノ課税ヲ爲スコトナセトセス租税ノ重複ニハ形式上ノ重複ト實質上ノ重複ノ別アリ形式上ノ重複トハ國家又ハ其他ノ公共團體ニ於テ同一ノ稅源ニ對シテ賦課スル場合アリ所謂附加税トシテ生スル所ノモノニシテ國家又ハ公共團體カ豫メ其同一ノ課稅物件ナルコトヲ豫期シテ徵收スルモノニシテ固ヨリ公正ノ原則ニ反スルモノニアラス實質上ノ重複ニハ國法上ノ重複即チ國家又ハ其他ノ公共團體ニ於テ同一ノ稅源ナルコトヲ知ラスシテ重複ノ賦課ヲ爲ス場合ト國際上ノ重複トシテ獨立國間ニ於テ互ニ其所在ノ外國人及ヒ在外ノ內國人ニ課稅スルニ由リ同一ノ稅

源カ二重ノ賦課ヲ受ル場合トアリ前者ハ税法ノ改正ニ依リテ之ヲ救済スルコトヲ得ヘキモ後者ハ國際税法ノ確定セサル今日ニ於テハ尙ホ未タ救済ノ手段アルコトナシ

此ノ如ク租税ノ賦課ハ租税ノ主體及ヒ税源ニ對シテ遍ク行ハレ時ニ重複ノ場合生スルニ至リモ仍ホ法規ノ上ニ於テ納税力ヲ有スル主體又ハ良好ナル税源ニ對シテ各國皆多少ノ除外例ヲ設ケサルモノナシ今之ヲ大別スレハ國際關係ニ於ケル除外例ト國內關係ニ於ケル除外例ノ二者ニ分類スルコトヲ得ヘシ

第一國際關係ニ於ケル除外例ハ又內國人ノ居住スル場合ト外國人ノ內國人ニ居住スル場合ノ二者ニ別タル外國ニ居住シテ其國ノ利益保護ヲ受クル內國人ハ恰モ自國ニ居住シ自國ノ保護利益ヲ受クル外國人ト同シク本國ノ課税ヲ免除輕減シテ所在國ノ課税ヲ負擔スルハ毫モ條理ニ反スル所ナシ然レトモ納税資格ノ條件租税ノ種類數額等ニ至リテハ未タ國際税法ノ統一スル所ナキヲ以テ或ハ消極的ノ衝突ニ由リテ税源ヲ有スルモ而モ租税ヲ負擔スルコトナク或ハ積極的ノ衝突ニ由リテ同一ノ税源ニ付キ本國並ニ居住國ニ對シテ二重

ノ租税ヲ負擔スルコトナシトセス歐洲ニ於テハスタイン以後國際税法ノ制定ヲ主張シ此問題ニ付テ研究スル者相次キ學說ノ上ニ於テハ一般ニ土地家屋資本並ニ營業ヨリ生スル利益ニ對スル租税ハ財源ノ存在スル國ニ於テ課税シ分頭税所得税消費税移轉税等ノ如キ租税ハ納税者ノ居住スル國又ハ消費移轉ノ行ハレタル國ニ於テ課税スヘシト爲セテ勿論元首皇族公使其他ノ在外官吏及ヒ其家族等ニ至リテハ別ニ絶對的身上ノ權トシテ一般ノ私人ト異ナリ殆ト其居住國ノ租税ノ負擔ヲ受タルコトナク唯時ニ內務行政ニ伴フ二三ノ負擔ヲ受ケタルコトアルニ止マレリ國際上ノ課税ニ付テ我國ノ所得税ノ如キハ明治三十二年二月法律第十七號所得税法第一條及ヒ第二條ニ於テハ積極ニ帝國內及ヒ此法律施行地ニ住所ヲ有シ又ハ一箇年以上居所ヲ有スル者ハ此法律ニ依リ所得税ヲ納ムル義務ヲ有シ尙ホ此等ノ條件ニ該當セサル者此法律施行地ニ資產營業ヲ有スルトキハ其所得ニ付テノミ所得税ヲ納ムル義務アル者ヲ規定シ一方ニハ第五條第六號ニ於テ消極的ニ外國又ハ此法律ヲ施行セサル地ニ於ケル資產、營業又ハ職業ニ因ル所得ニ對シテハ施行地ニ本店ヲ有スル法人ノ所得

ヲ除キ總テ所得税ヲ課セサル旨ノ規定アリ大體ニ於テ普魯西ノ所得税法ト其趣ヲ一ニセルカ如シ
第二國內關係ニ於ケル除外例ハ次ノ四種ヲ以テ其重ナルモノト爲ス
甲 皇室及ヒ皇族
乙 公法人
丙 保護政策其他ノ理由ニ因ル輸出入品
丁 營利ヲ目的トセサル公共事業
甲 皇室及ヒ皇族ノ所得及ヒ財産ニ對シテハ主體ニ於テ或ハ皇室ニノミ限定シテ皇族ヲ包含セサルモノアリ客體ニ於テ或ハ御料財産ニノミ限定スルモノアリ課税ノ種類ニ於テ或ハ國税ニノミ限定スルモノアリ皆各國ノ歴史上ノ沿革ニ依リテ其軌ヲ一ニスルコトナシ我國ニ於テハ皇室及ヒ皇族ニ通シテ一般ニ租税ノ賦課ヲ受クルコトナシ
乙 公法人ニ對スル課税ノ原則モ亦各國一定スル所アルナシ唯大體ニ於テ一方ニハ國税ハ一般ニ免除セラルルヲ原則ト爲スニ反シ地方税ノ負擔ハ漸次一般

ノ原則ト爲ルモノノ如シ
丙 保護政策又ハ其他ノ理由ニ因リ特種ノ輸入品獎勵ノ爲メ關税ヲ免除シ又ハ輸出品獎勵ノ爲メ輸出税ヲ免除シ時ニ戻税等ノ特權ヲ付與スルハ今日ニ於テモ一般ニ見ル所ナリ我國ニ於テ明治六年以來漸次各種ノ貨財ニ付テ之カ輸出税ヲ免除シ近時其類數百種ニ上ルニ至リ三十年三月法律第十四號關稅定率法ハ各種ノ貨財ニ付テ輸入税ヲ免除シ又明治二十一年七月勅令第五十四號ニ依リ輸出酒類ニ對シ造石税ノ戻税ヲ認メタリ
丁 營利ヲ目的トセサル事業ニ對シテハ各種ノ租稅殊ニ所得税ノ免除ヲ爲スハ各國一般ニ認ムル所ナリ所得税法第五條第四號參照

第二款 平等ノ原則

經濟ノ現象ニ於テ平等ト稱スルハ其與フル貨財ト受クル貨財トカ同一ノ價格ヲ有スルヲ謂フ故ニ所謂利益交換說又ハ公安保險料說ノ行ハレシ時代ニ在リ

テハ人民カ提供スル收納物ハ國家又ハ公共團體ヨリ受クル利益ニ伴フヲ以テ平等ナリト認メラレタリ固ヨリ相互提供ノ原則ハ條理ノ根底ヲ爲スモノナレトモ租税其モノハ根本ニ於テ國家カ自己ノ生存發達ヲ爲スカ爲メ其組成分子タル國民ヨリ徵收スル無償ノ納付タル以上ハ其納税力ニ應シテ租税ノ賦課ヲ爲スコトハ社會全般ニ對シテ平等ナリト謂ハスンハアラス

租税ノ負擔ノ平等ニ付キ經濟學上始メテ研究ヲ爲セタル者ハ「アダム・スミス」ニシテ唯氏ハ租税ノ負擔力ヲ以テ直チニ各人ノ所得財產ニ對シテ正比例スルモノナリト誤解セルコトハ先ニ一言セル所ナリ租税ノ負擔力ハ財產ト所得ニ依リテ其額ヲ異ニスルノミナラス同一ノ財產又ハ所得ハ必スシモ同一ノ負擔力ヲ有スルモノニアラス是レ財產又ハ所得ニ應スル支出ハ各種ノ原因ニ由リテ必スシモ相同シカラサレハナリ租税ノ負擔力ニ對スル平等ヲ保タンカ爲メ從來租税行政上用ヒ來リタル手段ニアリ一ハ租税ノ種類及ヒ賦課ニ關スル行政上ノ選擇ニシテ一ハ税率ニ對スル選擇ナリ前者ハ既ニ前款ニ於テ其大略ヲ述ヘシ所ニシテ後者ハ後チニ租税ノ分配ノ下ニ於テ比例税及ヒ累進税論トシテ別

ニ説明スル所アルヘシ

第三節 經濟上ノ原則

經濟上ノ原則トハ租税ノ賦課徵收ニ因リテ經濟上ノ損害擾亂ヲ來サシメサルコトヲ謂フ故ニ經濟上ノ原則ハ一ハ賦課徵收ノ方便ニ存シ一ハ課税ノ種類及ヒ其税額ニ存ス

第一款 賦課徵收ノ方便ニ關スル經濟上ノ原則

租税ノ賦課徵收ハ正確ニシテ簡易ナルコトヲ要スルハ先ニ財務行政上ノ原則ノ下ニ於テ一言セシ所ナリ蓋シ現時租税制度益々複雑ヲ極ムルニ至リテハ賦課徵收ノ方法モ亦勢ヒ益々複雑ヲ來シ隨テ賦課徵收ノ時期場所度數其他ノ手續ニ付テ正確簡易ヲ缺キ納税者ノ不便不利ヲ顧サルトキハ一方ニハ國庫ノ純收入額ヲ減少セ一方ニハ納税者ノ苦痛ヲ増加スルノミナラス國民ノ經濟上一般ノ生産ニ及ホス弊害亦尠シトセス故ニ租税ノ法規ハ之ヲ動スヘカラスト云ヘル

原則即チ古キ租税ハ最モ良税ナリト稱スルモ要スルニ習慣ノ勢力ハ社會ノ現象ニ通シテ最モ重大ナル影響ヲ有スルモノナルヲ其行ハルルコト久シクハ一般ノ人心ニ遡ハサルノミナラス其租税ノ種類及ヒ税額カ租税負擔ノ平等ヲ失スルコト大ナラサル以上ハ租税負擔ノ轉嫁ニ由リ或程度マテ經濟社會ノ關係ハ總テ其間ニ權衡ヲ維持スルニ至ルヘキコトヲ謂フモノニシテ亦多少ノ真理ナシト爲サス故ニ租税ノ法規ハ成ルヘク之カ時時ノ變更ヲ避ク一方ニハ其法規執行ノ方法ハ確實ニシテ且ツ簡易ナルコトヲ期スヘキモノナリトス

第二款 租税ノ種類及ヒ税額ニ關スル經濟上ノ

原則

租税ハ貨財ノ生産交易分配消費ニ對シテ重大ナル關係ヲ有スルカ故ニ貨財其物ニシテ之カ生産發達ノ望ムヘカラサル物例ヘハ奢侈品ノ如キハ比較的重税ヲ課シ生計ノ必需品ニ對シテハ成ルヘク之カ負擔ヲ輕減シテ之カ生産發達ヲ圖ルハ通常各國ノ税法ヲ通シテ觀ル所ナリ殊ニ國際貿易上特種ノ貨財ニ對スル發達ヲ望ム場合ノ如キハ課税ノ有無税率ノ輕重ハ直チニ其貨財生産ノ死活ヲ制

スルモノナルヲ以テ各國ノ輸出税ニ在リテハ各其國ノ狀況ニ伴ヒ各種ノ貨財ニ對シテ除外例ヲ設ケ時ニ戻税ノ法ヲ探ルコトアルハ先ニ一言シタル所ナリ又租税負擔ノ轉嫁ニ關シ立法者ハ一般人民ノ財産所得ニ據リ之カ負擔力ヲ審査シ成ルヘカ轉嫁ヲ豫期シ又ハ之ヲシテ轉嫁セサルコトヲ庶幾スルモノナルカ故ニ荷モ立法者ノ所見ニシテ失當ナラサル以上ハ常ニ豫期ノ目的ヲ達スルコトヲ努メスンハアラス負擔ノ不平等ハ一般經濟上ニ對シ荷モ弊害ヲ生シ易キモノナレハナリ

經濟上ノ原則トシテ最モ重要ナルハ税源ノ問題ナリ即チ納税力ノ問題ニシテ通常租税ハ所得ヨリ徵收シ財産ニ及フヘカラスト稱スルモノ是ナリ勿論税源ト爲ルヘキモノハ個人ノ所有權ニ屬スル貨財ナリ然レトモ均ク財産ト稱スルモノニシテ常ニ所有者力之ヲ利用シテ收入ノ基本ト爲スヘキ基本財産ト一定ノ時期ニ繰返シテ各人ノ財産ト爲ル收入財産即チ所得ノ別アリ前者ノ消費ハ之カ收入ノ財源ノ一部ヲ失フニ由リ之ニ伴フ所得ヲ減シ延テ經濟上ノ地位ヲ損スヘク後者ハ之ヲ消費スルモ財源ニ變更ナキ故ニ猶ホ同一ノ所得ヲ獲

得シ其經濟上ノ地位ヲ減スルコトナカルヘシ隨テ茲ニ經濟上ノ原則トシテ論
及スル所ハ租税ハ所得ニ止マリテ基本財産ヲ侵スヘカラスト謂フニ在リ故ニ
課税物件ノ人タルト所得タルト財產タルト事實タルトハ毫モ問フ所ニアラサ
ルナリ要ハ其租税カ箇人ノ財產ヲ侵シテ税源ヲ潤渴スヘカラスト謂フニ在リ
蓋シ租税重キニ失シ所得ト併セテ其基本財産ヲ侵蝕スルニ至レハ其結果人ノ
勤勉心ヲ抑制シ資本ノ増殖ヲ止メ人民ノ勤勞ト資本ハ其ニ外國ニ流出セラル
ルニ至ルヘシ是レ古代專制時代ノ財政史乘ニ於テ屢觀ル所ナリ
然ラハ如何ナル程度ニ於テ果シテ租税カ財產ヲ侵蝕スルニ至ルヘキカ先ツ所
得其モノニ付テ研究スル所ナクンハアラス蓋シ所得ハ之ヲ廣義ニ解釋スルトキ
ハ其所得ヲ得ル爲メニ要スル所ノ生産費ト收益トヲ包含シ後者ハ狹義ノ所得
又ハ純所得ト稱セラル而シテ箇人ハ純所得ノ一部ヲ以テ生計費ヲ支出シテ其
殘餘ハ或ハ之ヲ消費シ或ハ之ヲ貯蓄ス所謂自由所得ト稱セラルモノ是ナリ
故ニ箇人ノ經濟ニ於テハ所謂負擔力ヲ測定スヘキ標準ハ純所得ニ在ルモノト
謂ハスンハアラス然レトモ純所得ハ必スシモ負擔力ニ正比例セサルコトハ先ニ

平等ノ原則ノ下ニ於テ一言セル所ナリ然レトモ孰レノ所得ニ通スルモ租税ハ
強制ノ分配トシテ所得ニ於テ第一位ノ先占權ヲ有シ生産費及ヒ生計費之ニ次
キ其殘餘ヲ以テ始メテ貯蓄又ハ浪費ヲ爲スニ於テハ一ナリ故ニ租税ノ税率重
キニ隨ヒ先ツ浪費ヲ侵シ次キ貯蓄ヲ侵スヲ例ト爲スモノナリ而シテ租税カ其
貯蓄ノ全部又ハ大部ヲ侵スニ至レハ産業ノ發達ハ復タ之ヲ期スヘカラスト蓋シ
經濟上所得ノ額ニハ需要供給ノ原則ニ從ヒ自ラ一定ノ歩合アリ然ルニ今其步
合ヲ低減シテ箇人ハ得ル所ノ所得ニ由リ僅ニ生産費ヲ償ヒ自己日常ノ生計ヲ
維持スルニ止マリ他ヲ擧ケテ納税スルニ至リテハ租税ハ即チ重キニ失スルモ
ノニシテ貸財生産ノ動念ヲ阻壓スルモノナリ況ヤ租税カ生産費及ヒ生計費ヲ
侵蝕スルニ至レハ經濟上最モ忌ムヘキ狀況ニ陥リタルモノト謂ハスンハアラ
ス故ニ租税ハ需要分配ノ一部ニ止マリテ貯蓄又ハ浪費ノ餘裕ヲ殘存セシム
ルコトヲ要ス此問題ニ對シテ「ルロア、ボリウ」氏ハ其歩合ニ付テ次ノ如ク言
ヘリ「
凡ソ人民ノ負擔スル所ノ租税ハ國稅、府縣稅、市町村稅ヲ合シテ所得ノ百分ノ

五ヲ超過スヘカラス戰時其他ノ事變ニ際シ國家ノ財政上税率増加ノ必要ヲ觀ルニ至ルモ猶ホ所得ノ一割乃至一割二分ヲ限度ト爲スヘシ此限度ヲ超過スルトキハ經濟界ノ紊亂ヲ免ルルコト能ハス其ハ其理合ニ於テ大ニ當リト固ヨリ所得ニ對スル租税ノ比率ハ時ト所ニ依リ經濟上進歩ノ程度物價資金ノ高低資本ノ多寡等ニ依リテ必スシモ正確ナル標準ヲ立ツヘカラサルノミナラス國民ノ所得額ノ算定ハ頗ル不確實ナルモノナルヲ以テ結局其國ノ資本ノ増加生産力ノ發達等ニ依リテ之ヲ各箇ノ事實問題ニ就テ判定スヘキコト言フ埃タス要ハ租税ノ負擔重キニ失シテ税源ヲ侵シ產業ノ發達ヲ阻碍スルコトナカラシムルニ存ス

第三章 租税ノ分類

第一節 緒論

租税ハ其標準ヲ異ニスルニ從ヒ各種ノ分類ヲ爲スコトヲ得ヘシ學者或ハ大體ニ於テ理論的分類法ト實際的分類法ト二箇ニ別ツコトアリ經濟學上富ノ各分

配要素ヲ以テ收入ノ源泉ト認メ租税ハ此等ノ要素ニ賦課スヘキモノト爲ス莫ナリ「アダム・スミス」ハ租税論ノ劈頭ニ於テ「凡ソ一箇人ノ收入ハ畢竟地利潤及ヒ勞銀ヨリ生スルモノニシテ租税ハ窮極此等ノ收入ノ源泉ノ一箇若クハ二箇以上ヨリ支拂ハルルモノナリ故ニ此分類ニ從ヒテ各種ノ租税ヲ攻究スヘシ」ト言ヘルハ當ニ此意味ヲ表示セルモノニ外ナラス然レトモ此分類法ハ單純ニシテ且ツ經濟學ノ原則ヲ適用スルノ利便アルモ事實ニ於テ此單純ナル分類法ニ依ルコト能ハサルハ「アダム・スミス」自身カ土地ノ生産物ニ對スル課税ノ人頭税物品税等ニ付キ攻究セル所ニ據リ明カナル所ニシテ「ミル」ノ如キハ經濟上ノ源泉ニ從ヒテ分類スル租税ノ形式的種別ハ之ヲ所得ニ課スル直接税ノミニ限リテ適用スヘキモノニシテ物品税ノ如キ又ハ契約通信等ニ課スル租税等ノ如キハ全ク此以外ニ置クヘキコトヲ論セリ此ノ如ク「アダム・スミス」ノ理論的分類法ハ租税ノ分類ニ於テ實益少キカ故ニ近時皆多少實際上ノ便宜ヲ加ヘテ之カ分類ヲ試ルニ至レリ今其主ナルモノヲ舉クレハ次ノ如シ

第一 收納ノ實體ニ依ル分類

- (一) 實物税 (二) 勤勞税 (三) 貨幣税
- 第二 課税物件移轉ノ地域ニ依ル分類
 - (一) 國內税 (二) 國境税
- 第三 賦課ノ方法ニ依ル分類
 - (一) 配賦税 (二) 定率税
- 第四 負擔ノ種別ニ依ル分類
 - (一) 直接税 (二) 間接税
- 第五 課税物件ノ種類ニ依ル分類
 - (一) 人身税 (二) 財産税 (三) 行爲税或ハ事實税トモ曰フ
- 第六 租税ノ存續期間ニ依ル分類
 - (一) 常時税 (二) 臨時税

第二節 收納ノ實體ニ依ル分類

收納ノ實體ヲ標準ト爲ストキハ實物税勤勞税及ヒ貨幣税ノ三種ニ分類スルコ

ト得ヘシニ至ルモ、實物税ハ實物經濟時代ニ於テ行ハレタル租税ナリ我國ノ租税制度ニ於テハ史乘ニ於テ最早ク現ハレタルハ崇神帝ノ御代ニ於ケル弼ノ調及ヒ手末ノ調ニシテ其ニ獸皮又ハ布帛ノ類ヲ納付スル實物税ナリ孝德帝大化以後田租ハ調ヨリ之ヲ分離シテ地租繼稅及ヒ賦役ノ別ヲ立タタリ租庸調ノ制是ナリ當時ノ收納物ハ米穀絹糸綿布鐵鹽魚介海藻ノ類ニシテ藤原氏勢力ヲ得テヨリ源平ノ時代ニ至リテハ調ノ制ハ大ニ衰ヘ當時小物成ト稱セラレ山海ノ年貢ハ上古ノ調ノ一部ヲ殘存シ又課役ノ一部トシテ實物ノ納付ヲ爲サシメタルコトハ徳川時代ニ至ルモ猶ホ繼續シ一方ニハ貨幣經濟ノ發達スルニ從ヒ漸次實物税ハ貨幣税ニ變形スルニ至リ現時ニ於テハ特種ノ事情ヲ有スル場合ニ於テ稀ニ實物税ヲ用ヒラルルニ過キス維新前ニ於テハ沖繩縣ノ砂糖ノ上納八丈島ノ絹布ノ上納ノ如キ其一例ニシテ稀ニ地方自治團體ニ於テ現品ノ徵收ヲ行フコトアリ

古代ノ實物税ニ付テ注意ヲ要スヘキコトハ貨幣經濟ノ時代ニ於テ實物ト認メ

ラブル物例へハ米、蠶、布帛又ハ魚介等ノ類カ古代ニ在リテハ又貨幣トシテ用ヒラレタルコト是ナリ故ニ古代ノ租税ニ於テハ今日ノ所謂實物税ト視ルヘキモノニシテ猶ホ其全部又ハ一部カ貨幣税トシテ認ムヘキモノ歟シトセス故ニ我國ノ租税ノ如キモ古代ニ於ケル田租ノ如キハ又其時代ニ於ケル一種ノ貨幣税タルコトヲ妨ケサルモノナリ

第二 勤勞税 勤勞税トハ一般ニ課役ト稱セララルモノナリ課役ノ制モ崇神帝ノ時始メテ人民ヲ檢校セ長幼ノ別使役ノ前後ヲ定メタリキ大寶令ノ時課役ノ制又大ニ發達シ庸ハ口ニ課スルモノニシテ男子二十一歳ヨリ六十歳ニ至ル成丁ニハ十日、十七歳ヨリ二十歳ニ至ル中男及ヒ六十歳ヨリ六十五歳ニ至ル老丁ニハ五日ノ歳役ヲ課シ若シ現役ニ服セサレハ之ニ相當スル庸布ヲ納付スルコトト爲セリ庸ノ制モ源平以後兵亂相繼クニ隨ヒ漸次衰退シ唯課役トシテ内裏社殿等ノ造營及ヒ城池道路橋梁堤防ノ構築修繕ノ運檢等事アルニ臨ミテ民人ヲ使役シタリ其後鎌倉時代ニ於テ一時盛ニ行ハレシモ爾後漸次其度ヲ減シ明治八年ニ至リテ殆ト其跡ヲ絶チ唯チ唯チ地方自治團體ニ於テ治水其他ノ場合ニ夫

役トシテ稀ニ民人ニ課役スルコトアルニ過キス

第三 貨幣税 貨幣税ハ貨幣經濟ノ發達ト共ニ現時遍ク行ハラルモノニシテ貨幣税カ財務行政ノ整理財政學ノ發達ト密著ノ關係ヲ有スルコトハ前ニ財政學史ノ下ニ於テ一言セル所ナリ

第三節 課税物件移轉ノ地域ニ依ル分類

課税物件移轉ノ地域ヲ標準トスルトキハ國內稅國境稅ノ二種ニ分類スルコトヲ得ヘシ

第一 國內稅 國內稅トハ課税物件カ内外國間ニ移轉スルコトヲ條件トスルコトナクシテ徵收スル租税ニシテ一般ニ内地居住ノ人民ヨリ徵收スルヲ原則ト爲スモノニシテ其納稅者ノ内外國人何レニ屬スルヤハ問フ所ニアラス國內稅ハ又別レテ國稅及ヒ地方稅ノ二種トス國稅地方稅分類ノ標準ハ各國法制ノ異ナルニ隨ヒ一致スル所ナシ然レトモ大體ニ於テハ賦課徵收ノ地域ヲ標準ト爲スモノト其徵收品ノ使途ヲ標準ト爲スノ別アリ前者ニ在リテハ中央政府カ

全國一般ニ通シテ徵收スル租稅ヲ國稅ト謂ヒ府縣市町村等ノ公共團體カ各自其行政區畫ニ於テ徵收スル租稅ヲ地方稅ト謂フ後者ニ在リテハ中央政府カ國家一般ノ經費ヲ支辨スルカ爲メ徵收スル租稅ヲ國稅ト謂ヒ府縣市町村等ノ公共團體カ中央政府ヨリ付與セラレタル權限内ノ職務ヲ行フカ爲メ徵收スル租稅ヲ地方稅ト謂フ

我國ニ在リテハ維新當初ニ於テ租稅ハ總テ國稅タリシモ明治八年二月從來ノ雜稅中國稅トシテ存スヘキモノノ外ハ悉ク之ヲ廢止シ同年九月第四十號布告國稅地方稅區別ハ租稅ノ賦金ヲ國稅府縣稅ノ二ニ別テ全國一般ニ賦課スヘキ分ニシテ大藏省ニ收入シ國費ニ供スルモノ即チ前二條ノ條件ヲ兼テタルモノニ限リ國稅ト爲シ賦金ト稱シテ收入スル諸稅及ヒ地方ニ於テ收入スル雜稅ヲ府縣稅ト稱シタリ明治十一年七月府縣稅ヲ改メテ地方稅ト稱シ明治二十一年ニ至リ又新ニ市町村稅ナルモノヲ生シ同二十三年再ヒ府縣稅ノ制ヲ起シテヨリ國稅府縣稅市町村稅ノ三種ヲ見ルニ至レリ然ルニ今日ニ於テハ彼ノ北海道水產稅明治二十年三月勅令第三號沖繩縣酒類出港稅明治二十年三月勅令第

十三號ノ如キ之ヲ國稅ト爲セルヲ以テ觀レハ必スシモ二者ノ條件ヲ兼セルコトヲ必要トセス其徵收物ノ使途ヲ標準トシテ亦國稅地方稅ノ區別ヲ立ツルモノタルコトヲ知ルヘシ

第二 國境稅 國境稅トハ内外國間ニ課稅物件ノ移轉スルコトヲ直接ノ條件トシテ内外國人ヨリ徵收スル租稅ナリ國境稅ハ二國以上カ陸上ニ於テ相隣接スル場合ト海洋ヲ境界トスル場合ノ別アルニ因リ後者ノ場合ヲ特ニ海關稅ト稱スルコトアリ故ニ我國ノ如キ島國ニ於テハ國境稅ハ同時ニ海關稅ト同意味ヲ有スルモノナリ國境稅ハ細別シテ輸出入稅及ヒ通過稅ノ二種ト爲ス

輸出入稅トハ内外國ノ間ニ或特定ノ貨財ノ出入ニ據リテ賦課スル租稅ニシテ或ハ財政上ノ收入ヲ目的トスルコトアリ或ハ商業政策上ノ趣旨ニ出ツルコトアリ保護貿易ノ盛ニ行ハレタル時代ニ在リテハ粗製品原料品等ニ對シテ輸出稅ヲ課スルコト廣ク認メラレシモ漸次其種類ヲ減シ現時ハ輸出稅ヲ免除スルヲ以テ原則ト爲スニ至リ時ニ或ハ生産獎勵ノ爲メニ戻稅ノ制ヲ設ケ或ハ別ニ補助金獎勵金等ヲ與フルコトアリ又輸入稅モ保護貿易ノ盛ニ行ハレタル時代

ニ在リテハ精製品等ニ對シ廣ク且ツ重ク賦課セラレ時ニ絕對ニ輸入ノ禁止ヲ爲セシコトアリシモ現時ハ其程度漸次輕キヲ加フルニ至レリ然レトモ今日ニ於テモ財政上ノ收入ヲ目的トシ併セテ多少ノ貿易政策上輸入税ヲ賦課スルハ各國ニ通シテ觀ル所ニシテ貿易政策ヲ加味スルコトナク純然タル財政上ノ收入ヲ目的トシテ輸入税ヲ賦課スル國ハ現時唯英吉利及ヒ「バルガン」半島ノ諸國ニ於テ之ヲ見ルニ過キス但シ英吉利ハ保護政策ヲ要スヘキ時代既ニ經過セルニ原因シ「バルガン」半島ノ諸國ハ自國ノ幼稚ナルト外國ノ干涉トニ因リ保護政策ヲ要スヘキ時代ニスラモ到著セサルニ原因スルハ言ヲ俟タサル所ナリ通過税ハ古來廣ク行ハレタルモノニシテ外國ヨリ自國ノ陸上又ハ領海ヲ通過シテ外國ニ出入スル場合ニ賦課スルモノナリ歐洲大陸ノ如ク海陸ニ於テ列國互ニ相隣接セル所ニ在リテハ通過税ハ又重要ナル問題ニ屬シ獨逸聯邦カ十九世紀ノ上半期ニ於ケル間税ノ歷史ハ其有名ナル一例ナリ我國ニ於テハ比較的利害關係少キモ現時東洋諸國及ヒ亞米利加間ノ航路ニ於テハ我橫濱神戸馬關長崎ノ如キハ常ニ通過港ト爲ルヘキヲ以テ理論上ニ於テハ固ヨリ通過税ヲ課

シ得ヘカラサルニテラス通過税ハ我國將來ニ於テ又重要ナル問題タルヘキナリ

第四節 賦課ノ方法ニ依ル分類

賦課ノ方法ヲ標準ト爲ストキハ配賦税及ヒ定率税ノ二種ニ分類スルコトヲ得ヘレ

第一 配賦税 配賦税トハ初ヨリ徵收セントスル所要ノ數額及ヒ課税物件ヲ一定シ之ヲ課税者ニ分擔セシムル租税ニシテ當初ヨリ被税者ニ其負擔スヘキ税額ヲ配賦スルコトアレトモ多クハ先ツ各地方團體ニ配賦シ各箇ノ被税者ニ對スル負擔ノ分屬ニ關シテハ一ニ其地方團體ニ委任スルヲ常トス此種ノ方法ハ先ツ被税者及ヒ課税物件ニ付テ正確ナル調査ヲ爲シ得ヘキコトヲ要シ且ツ比較的ニ永ク繼續セテ時時ノ變動大ナラサルモノ換言スレハ租税臺帳ニ依リテ賦課徵收シ得ヘキモノニ限ラルヘキヲ以テ所謂直接税ナルモノニ付テ此方法ヲ採用スルコトヲ得ヘレ配賦税ノ最モ盛ニ行ハルルハ佛蘭西ニシテ佛蘭西

ハ直接税ハ配賦法ニ依ルヲ原則トシ議會ハ先ツ徵收スヘキ租税ノ總額ヲ定メ
 タ之ヲ最高ノ行政區畫タル各縣ニ稅額ヲ配賦シ縣ヨリ郡及ヒ市ニ郡ヨリ町村
 ニ町村ヨリ被稅者ニ順次其課稅物件ノ價格ニ應ジテ配賦スルノ法ヲ採レリ
 我國ニ於テハ配賦稅ナルモノナシ唯北海道水產稅ハ少シク之ニ似タル所アル
 モ其賦課ノ數額ハ財政上所要ノ數額ニアラスシテ唯水產稅ヲ賦課スル標準ヲ
 過去數年間ニ於ケル水產物ノ價格ニ取ルニ過キタルヲ以テ單ニ形式ニ於テ少
 シク配賦稅ニ似タル所アルニ過キサルナリ北海道水產稅則第三條第六條第一
 六條參照配賦稅ノ利益ナリトスル點ハ要スルニ其所定ノ額ヲ正確ニ徵收スル
 コトヲ得ルニ在リ然レトモ伸縮力ヲ有セサル點ニ於テ人民カ納稅額ノ幾何ナ
 ルヘキヤヲ知ルコト能ハサル點ニ於テ其配賦ノ度數多キト共ニ其團體相互間
 ニ於テ各被稅者相互間ニ於テ不公平ノ生シ易ク且ツ大ナル點ニ於テ弊害渺カ
 ラサルカ故ニ各國皆配賦稅ニ依ルモノ少シトス

第二 定率稅 定率稅トハ單ニ課稅物件ニ對スル稅率ヲ一定シテ徵收スル租
 稅ヲ謂フ故ニ其收入ノ總額ハ會計年度ノ終ニ至ラサレハ之ヲ正確ニ知ルコト

能ハスト雖モ間接稅ノ如キハ配賦稅ニ依ルコト事實不能ナルノミナラス此方
 法ハ配賦稅ト利害相反スルモノニシテ其稅率一定スル點ニ於テ被稅者ハ自己
 ノ負擔額ヲ知ルコトヲ得又一般ノ平等ヲ期シ易ク經費ノ増加ニ隨伴スルコト
 比較的容易ナリ我國ノ租稅ハ總テ定率稅ニ依ルモノニシテ我國稅法ノ一特色
 タリ

第五節 負擔ノ所在ニ依ル分類

租稅負擔ノ所在ヲ標準ト爲ストキハ直接稅及ヒ間接稅ニ分類スルコトヲ得ヘシ
 直接稅間接稅ノ種別ハ行政上政治上重大ナル關係ヲ有スルノミナラス學理上
 其沿革古クシテ租稅問題ニ於テ最モ議論多キ一ナリトス此分類カ學說上ニ表
 ハレタルハ第十三世紀ニシテ「ジャン・ボーダン」ノ「レバブルク」ヲ始メトシ重農
 學派ニ由リテ最モ詳細ニ研究セラレ爾來直接稅及ヒ間接稅ノ意義ニ付キテハ
 幾多ノ變遷ヲ經テ現時ハ學理上ノ分類ヲ試ムル者ト實際上ノ分類ヲ試ムル者
 「其分類ノ根底ノ標準ニ於テ說ヲ異ニスルモノ在ルニ至レルノミナラス總括

ニ直接税間接税ノ分類ヲ非難スル者又相應テ出ツルニ至レリ。所謂學理上ノ分類トハ租税負擔ノ所在ヲ標準ト爲スモノニシテ時ト所トニ依リテ其解釋ノ異ナルニ從ヒ又幾多ノ變遷移動ヲ生セリ。今時期ニ據リテ其學說ノ主ナルモノヲ舉クレハ次ノ如シ。

第一說 本說ハ重農學派ノ唱道ニ係ルモノニシテ重農學派ノ單一税論ハ同時ニ直接税ト相關聯シ地租ヲ以テ唯一ノ直接税ト爲シ其他ノ租税ハ總テ之ヲ間接税ト看做シタリ蓋シ此學派ハ土地ノミヲ以テ唯一ノ生産物ト爲シ農業ヲ以テ純收入ヲ生スヘキ真正ノ生産業ナリト認メシヲ以テ生産的ノ土地ニ賦課スル地租ハ經濟上新ニ價值ヲ造出シ又ハ増加スル直接ノ財源ニ賦課スル租税ナリト人類若クハ貨物其他ノ商工業ニ賦課スル租税ハ結局其負擔ハ眞ノ生産ヲ爲スヘキ土地ニ歸著スヘキヲ以テ總テ間接税ナリト云ヘリ故ニ重農學派ノ單一税論ハ租税ノ負擔ノ轉嫁ハ租税其モノノ本質ニ反スルモノナリト解釋セルコトハデラウリビニール氏カ租税ノ體形ハ之ヲ其存セサル所ヨリ徵收スルコトヲ望マスシテ其現存スル所ヨリ直接ニ徵收スルニ在リ租税ノ此直接ノ體形

ヲ變シテ間接ノ手段ニ訴フルハ自然ノ順序ヲ顛倒スルモノニシテ非常ナル不便ト不利ヲ生スルモノナリト言ヘルニ依リテ觀ルモ明カナル所ナリトス故ニ重農學派ノ學說ハ均シク負擔ノ所在ヲ標準ト爲シ負税者ト納税者ト相合致セル場合ヲ直接税ト爲シ二者相異ナル場合ヲ間接税ト爲シタルモ其土地ヲ以テ唯一ノ税源ト爲シタル根底ノ誤謬ハ地租ヲ以テ唯一ノ直接税ト認ムルニ至レリ

第二說 本說ハ獨逸ニ於ケル一部ノ學者カ唱道セル所ニ係リ財産ノ取得ニ基キテ徵收スルモノヲ直接税トシ財産ノ消費ニ基キテ徵收スルモノヲ間接税ナリト論セリ「カール・ハインリッヒ・ゾウ」評價税ト出費税ノ區分即チ直接ニ納税力ヲ確定セルモノヲ直接税トシ出費ニ據リ納税力ヲ測定スルモノヲ間接税ト爲セルカ如キ又ハ所得及ヒ財産ノ直接ノ現象ニ賦課スルモノヲ直接税ト爲シ其間接ノ現象即チ消費及ヒ財産ノ移轉等ニ賦課スルモノヲ間接税ナリト論セルカ如キ皆同一ノ意義ヲ示セルモノニシテ所謂論者ノ消費税ナルモノニ直接ノ消費税タル住居税僕婢税等ト間接ノ消費税タル酒税醬油税等トノ區別アルコ

トヲ混同セルモノナリ現時猶ホ此學說ニ基キラ「ウルラシブルク」王國ニ於テハ
 犬税ヲ以テ間接税ノ一種ト爲セリ
 第三說 本說ハ負擔ノ所在ヲ標準ト爲スト同時ニ租税ノ數額カ負擔者ノ財産
 又ハ所得ニ對シテ比率ヲ保ツヤ否ヤヲ以テ分類ノ重ナル標準ト爲シ其一定ノ
 比率ヲ有スル租税ヲ以テ直接税ト爲シ比率ヲ有セサル租税ヲ以テ間接税ト爲
 スモノナリ「ルロア、ボリニ」氏ノ如キハ此觀念ヲ抱持スル者ニシテ氏ハ直接税
 及ヒ間接税ニ付キ此ノ如キ學理上ノ定義ヲ下セリ曰ク直接税トハ立法者カ眞
 ノ負税者ヲシテ支拂ハセムル租税ニシテ當初ヨリ其財産若クハ收入ニ比例シ
 テ之ヲ賦課シ中間ノ納税者ナルモノナク常ニ負税者ノ財産若クハ收入ニ比例
 シテ平等ナランコトヲ期スルモノナリ間接税トハ立法者カ負税者ノ誰タルヲ
 問ハス又負税者ノ納付スル税額カ其者ノ財産若クハ所得ニ對シテ平等ヲ保
 ルヤ否ヤヲ問ハス間接ニ中間ノ納税者ヲ經由シテ徵收スル租税ナリ此學說ニ
 對シ其比例ナル語ニ拘泥シテ直接税中ニハ累進税ヲ探ル者アルヲ理由トシ此
 定義ヲ非難スル者アリ然レトモ「ボリニ」氏ノ意見ハ要スルニ立法者カ負税者

報 載

○損害賠償ニ關スル特別規定 後法ハ前法ヲ廢ストハ二箇ノ法律カ相抵觸
 セル規定ヲ爲シタル場合ニ於ケル法則適用上ノ原則ナリ然レトモ一般法ト特
 別法トカ相抵觸スルコトアルモ決シテ兩立セザルモノニ非ス我民法ハ其第七
 百九條ニ於テ不法行爲ニ因ル損害賠償ノ原則ヲ定メ故意又ハ過失ニ因リテ他
 人ノ權利ヲ侵害シタル者ハ之ニ因リテ生シタル損害ヲ賠償スル責ニ任スト云
 ヘリ此規定ハ刑事訴訟法第十三條ノ規定ヲ廢止スルノ效力アルヤ否ヤニ付キ
 大審院ハ説明シテ曰ク「刑事訴訟法第十三條ハ告訴發等ニ關シ特別ニ損害賠
 償ノ責任ヲ定メタル法條ニシテ一般ノ賠償責任ヲ定メタル民法第七百九條ト
 抵觸スルモノニアラサルカ故ニ同第十三條ノ規定ハ民法實施ノ後ト雖モ依然
 其效力ヲ有スルコト勿論ナリ」(明治三十五年(即第二十二號)十月三日第
 二民事判決)

○假差押ノ履行爲替假差押ハ金錢ノ債權又ハ金錢ノ債權ニ換フルコトヲ得ハ

キ請求ニ付キ強制執行保全ヲ爲スモ之ヲ爲スモノニシテ民事訴訟法第七三七條其執行ニ付テハ一般強制執行ニ關スル規定ヲ準用スルヲ原則トシ(同第七四八條假差押命令ヲ言渡シ又ハ申立人ニ送達シタルヨリ十四日ノ期間内ニ執行ニ着手シタルトキ及ヒ判決又ハ決定ヲ以テ假差押ヲ取消サレサル間(同第七四六條第二項第七七條第一項第七五四條)ハ其效力ヲ有スルモノニシテ債務者カ本案訴訟ニ敗訴シ其判決ヲ確定シタルトキハ當然強制執行ヲ爲スコトヲ得ルモノトス是レ法ヲ明文ナシト雖モ性質上當ニ然ラサルヘカラサルモノト信ス同第七四六條第七四八條參照是レ大審院ノ認ムル所ナルカ如シ今其判決理由ヲ摘示セシニ白ク凡シ假差押ナルモノハ金錢ノ債權ヲ強制執行ヲ保全スルヲ目的トス(キモノナルカ故ニ其金錢ノ債權ニシテ確定スルニ至レハ右假差押バ之ヲ解除セスシテ直チニ強制執行ニ移リ即チ本差押ニ變更シ之ヲ續行スルヲ得ヘキコト)既ニ當院判決意トシテ認ムル所ナリ判例ナリ而シテ訴訟中ニ其訴訟ノ目的物ニ變更ヲ來シタル場合ニ於テハ起訴ノ當時ニ於ケル狀態ニ依ラスシテ判決當時ノ狀態ニ依リ其裁判ヲ受クヘキモノナルコトモ亦當院ノ法

理トシテ認ムル所ノ判例ナリ(大審院明治三十五年十月號有報論假差押事件判決書)○討論會 去ル十月十一日午後六時ヨリ本校内ニ於テ第一回討論會ヲ開キ

秋山學士會長席ニ著カレ同學士ノ出題ニ係ル

政治上ノ犯罪者ニ關シ軍艦ノ庇陰權ハ法律上正當ナリヤ否ヤ
ノ問題ニ付キ討論シタリ其極端說ノ大要ハ國家間ニ於テ政治犯罪者ノ引渡ヲ拒ムハ法律上正當ナルカ故ニ其國家ヲ代表スル軍艦ニ於テモ之ヲ庇陰スルヲ正當ナリト云フニ在リテ消極說ノ大要ハ軍艦ノ治外法權ハ其性質上陸地國ノ利益ヲ妨害セサル範圍内ニ於テ之ヲ有スルニ止マリ彼ノ外交官ノ有スル治外法權ノ如ク絕對的ノモノニ非ス而シテ外交官ハ政治上ノ犯罪者ヲ公使館内ニ於テ庇陰スルノ權利ナキニ軍艦カ此權利ヲ有スルハ權衡ヲ得スト云フニ在リキ採決ノ結果消極說ニ決シ終ニ會長ハ政治犯罪人ノ引渡ヲ爲ササルハ主トシテ國家ノ利害關係ニ基クコト歟ニ軍艦カ領土外ニ在ル場合ニ注意セサルヘカニサル旨ヲ述ヘ討論者ノ論旨ニ對シテ一一批評ヲ加ヘ十時三十分閉會シタリ

י

出題)

十分閉會シタリ

注意

謝ヲ納付セラルヘシ

様注意セラルヘシ

一三十五年度第二學年講義錄發行日ヲ自今八日及ヒ二十三日ニ變更ス

十二月

和佛法律學校

第二回討論會ハ同月二十五日午後六時ヨリ開會シタリ同日モ秋山學士會長席

ニ著カレ左ノ問題ニ付キ積極消極兩論者交々登壇シテ辯論ヲ圖ハシタリ

理事ハ定款ノ規定ニ違反セル總會ノ決議ヲ執行スルノ義務アルカ塚田學士

出題

今兩論者ノ大要ヲ記サンニ積極論者ハ理事ハ法人ノ機關ナルヲ以テ民法第五

十三條第六十三條ノ規定ニ基キ如何ナル場合ニ於テモ總會ノ決議ニ從ヒ之ヲ

執行セサルヘカラスト論シ消極論者ハ民法第五十三條及ヒ第六十三條ニ總會

ノ決議ニ從ヒテ事務ヲ行フヘキ旨ヲ規定シタルハ其決議力定款ニ違反セサル

場合ニ限ラサルヘカラス若シ其違反ノ決議ヲ執行スルカ如キコトアラハ民法

第四十四條第二項ニ依リ賠償ノ責ニ任セサルヲ得サルコトアリ斯ル制裁ノ存

スル以上ハ定款ニ違反セル決議ハ之ヲ執行スルノ義務ナシト謂ハサルヘカラ

スト論シ採決ノ結果消極說ノ勝ニ歸シ終ニ會長ノ詳細ナル批評アリテ十時三

十分閉會シタリ



注 意

一 三十五年度講義錄ハ來ル一月完結スヘキヲ以テ全部校外生ハ同月マツ月

謝ヲ納付セラルヘシ

一 本校講義錄ハ第三種郵便物認可ノ都合上自今三十五年度三十六年度ヲ通

シテ號ヲ逐フヘキニ由リ表紙第一面録書ノ號數ノ爲メニ誤ラサルコトナキ

様注意セラルヘシ

一 三十五年度第二學年講義錄發行日ヲ自今八日及ヒ二十三日ニ變更ス

十一月

和佛法律學校

法學志林

每月一、四、十五日發行
校友、生徒、或外生、限リ
一冊特價郵税共金九錢
十冊同金郵税共金八十錢

第三十六號

十月十五日發行

志林

○最近判例批評 法學博士 梅 謙次郎
○私法ノ研究ト社會法 法學士 志田御太郎
○賭博罪ニ就テ 法學士 古賀 康造

纂論

○取引所(續) 法學士 海山 獵夫
○第一買權者ノ債權ノ期限到來前ニ於ケル轉賣權者ノ權利 法學博士 富井 政章

解疑

○法定代理人ノ爲シタル控訴ト被告入ノ處分權 法學士 豐島 直通
○「ダニユー」同委員會ノ成立、組織及ヒ國際法上ノ地位 法學士 秋山 雅之介

○親族編、相續編ニ依ル權利ト和解 法學士 吾孫 子勝

○應能訴權ト轉得者ノ惡意トノ關係 法學博士 梅 謙次郎

寄書

○非常大權ノ行動ヲ論ス 校 友 神居 繁太郎

其他 判例、雜報、記事 數十件

發行所 和佛法律學校

(明治三十五年十一月九日內務省許可)

(明治三十五年十一月四日第三種郵便物認可 毎月十八回三日五日六日八日十日十一日十三日十五日十六日十八日廿一日廿三日廿五日廿六日廿八日廿九日卅日發行)

明治三十五年十一月七日印刷

(定價金貳拾五錢)

明治三十五年十一月八日發行

編輯兼發行所

萩 原 敬 之

印刷者

小 宮 山 信 好

印刷所

金 子 活 版 所

發行所 司法省

和佛法律學校

(電話番町百七十四番)

東京市麹町區富士見町六丁目十六番地